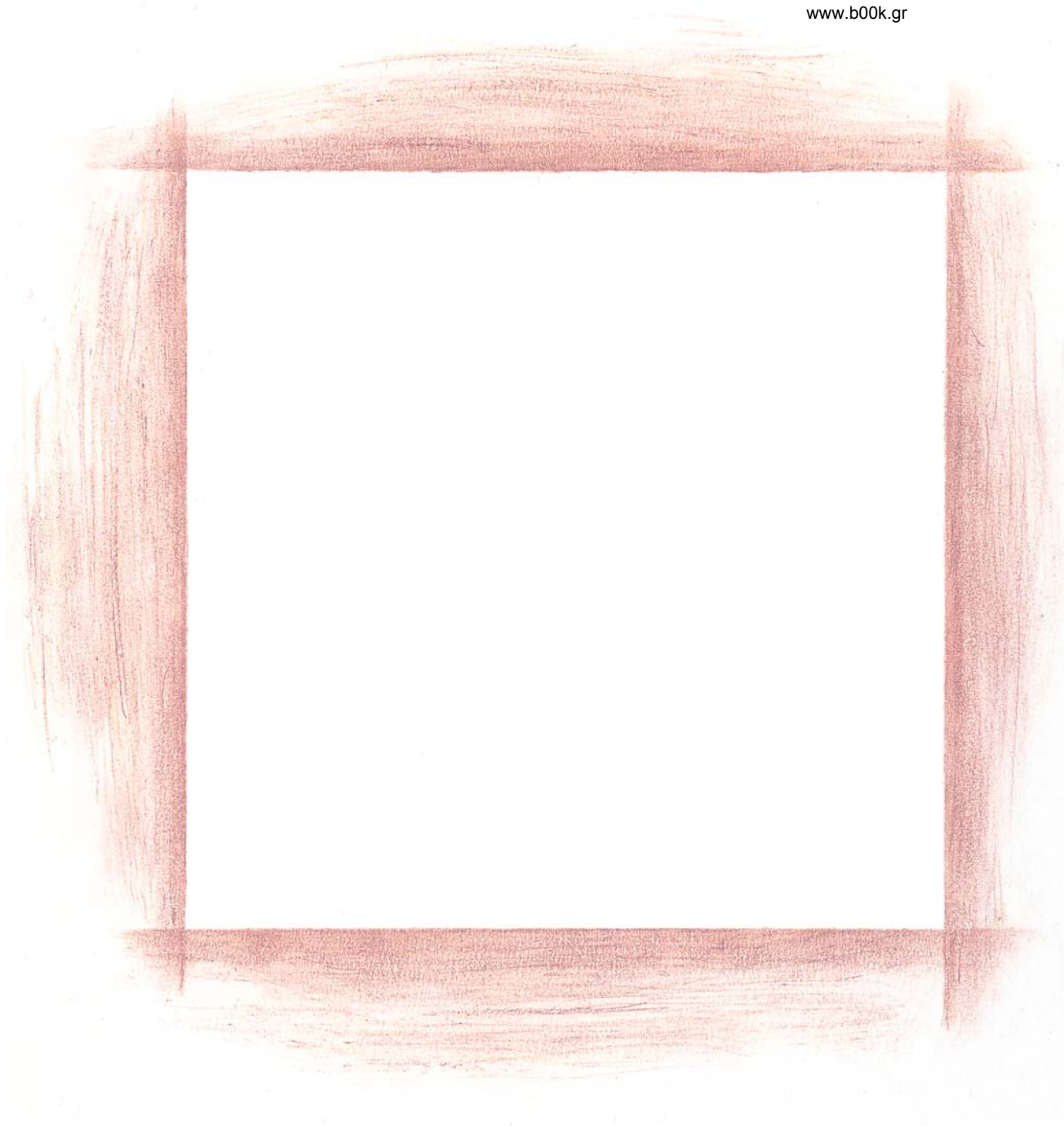




(本文外の文章)

—印刷されるページは書籍の様式ではありません。

—ページ数はP D F形式のファイルのみ追加されています。

—文章およびデザインは読者のためだけのものであり他に使用されません。

青い蝶

小さな体に、
大きな羽をまとう全ての者達へ…

* * *

朝であり、そして太陽が、熱く、光で青々とした森を洗っていた。花々は沢山の色に、茂みや積まれた群葉に咲き、一方で風は木々の陰を和らげながら掠めるようにゆっくり通って行った…

小さな空き地の青い花々に——涼気の湖のように——透明な匂いを周囲に撒き散らしていた。

「おはよう…」、
小さな蝶は言って大きな花びらにそっと身を任せた。

...

「…おはよう」それは答えた。そのような優しさに不慣れておらず、おずおずと眠い眼差しを半分開けた。

「少し飲んでもいい？」
答えなかったが彼女は喉が渴いていて、貴重なその真ん中に屈んだ。先ほど生まれたばかりで、しかしこの花蜜は彼女に命を与えるかに思えた…
食欲に幾つかの滴を吸って去ろうとした。

「ありがとう」、青い花に言った。しかしそれはまた答えなかった。彼女がその周りを飛ぶのをただ見ただけで、少しの間風に遊び、そしてその後空き地の向こうに消えて行った。

その目を閉じた。

「少し飲んでいい？」

老いた木の根元にある白い花に、小さな蝶はそっと尋ねた。

「私は、ご覧の通り、こんなにも喉が渇いて…」

それは喋らなかった。少し茎を高く伸ばし、そして白い花びらをより低く引いた。地は夜露の残りを放出させ、その傍ら向こうの鳥たちのさえずりが、森の隅々まで遠く聞こえていた。

…飲もうと身を屈めながら小さな羽をその上に広げ、その時光は青い彼女の色を貫いた…

乾燥した地が雨を欲するように、地の甘露を求めている…

「沢山の蝶を見てきた」白い花は理解不可能な言葉を独りごちた… 「…全てがまるで、自分達の色を忘れているかのような…」

「…空は、そしてそれすら、暗くなる。」

小さな蝶は驚いた。彼女には何も、言うこともなく言えなかった。

彼女は止まった。彼女の青い影が遊ぶのを見つめた——雲のような——真っ白な花びらの上に…

その後一度か二度羽を開いたり閉じたりし、そして黙って風に滑った。

...

…春の森の少し上、高く昇った。そして木々の頂に

彼女の笑いを振り撒きながら、そこに留まった。今朝まで狭い蛹に閉じ込められていた。そしてその前は茂みの葉の貪欲な毛虫…

細い枝の間を飛びながらどれだけ本当にその二枚の羽に恩があるか考えていた。

…多くを覚えていないまま、かつては周りの幹がどれだけ高く思っていたか確かに覚えていた。それほど達し難いこの頂。殆ど決してそれらを巡らなかった程の。

そして茎さえ巨大に思えた…

しかし何があったにしろもはや忘れ去られたかのようだった。今や初めてののように、人生の美しさを味わっていた。葉の涼気。

そして枝の温もり…

白い花の言葉だけが早くから彼女の脳裏を巡っていた。それまでに、夜が落ちる時間に至っていた…

本当にまだ他の蝶たちに会っていなかった。しかし以前から、覚えている限り、彼女には皆同じに思っていた。

...

「今晚は」、
優しく金色の花に言ってその上に下りた。

「とても不思議」、それに微笑んだ…
「太陽は沈むけれど君はずっと輝く太陽に似ている。」

「…空の真ん中から落ちたみたいに…」

太陽の形の花は放射線状の花弁をもじもじして遊ばせた。

…数多の黄色い花々の一つ、そのような言葉を聞くことなど決して期待していなかっただろう。そしてそれがいる空き地は確かにそのような花々で満ちていただろう。しかし小さい蝶はそれを見つけてとても嬉しそうだったので何も言わなかった…

彼女が自分の周りを飛ぶのをただ見ていた、小さな青い炎のように。太陽は山々の後ろに消えた——森に闇の光が再び咲いた…

彼女がそのビロードの円盤にそっと触れるままにさせた。

その上に彼女の透明な羽を広げて静かに目を閉じるままに。

「そして君にも…」囁いて、もはや聞いてはいなくとも「…君の羽は震えているが風に耐えている…」

「君の色、暖かい…」

君の色はもっと暖かい、空の永遠の色よりも。」

柔らかい花弁の上に、まだ少し彼女の夢が広がるのを見つめた。彼女が自分の身体に寄りかかるのを感じた、彼女の小さい身体。そしてその後一緒に目を閉じた。

小さな青い空は休息しただろう——疲れて——その夜、太陽のどれかの、光線の上で。



小鳥たちのさえずりは昼を彼等の近くへ呼ぶようだった。

それは——不本意でためらいがちとも言えたりう——、彼等の呼び出しに応えるまで。より一層美しく起き上がり始めた… 小さな谷で色と眩しい光をまとい広げつつあった。

それと一緒に輝き、そして恐らく応じていた。

...

青い蝶は金色の花の上で遅くに目覚めた。

それは、目を開けると、彼女の眼差しに合った… どちらも深く感覚が鈍っており、経った時間のためだったろう。

しかし最初に、話す意思を見つけた。

「…これからは木々の切れ目で眠るべきだろう」静かに彼女に言った。「夜は、森の空き地ではいつもずっと厳しく広がる。」

「そして湿気は君の青い色を損なうかも知れない…」

小さな蝶はまだ眠かった。夜明けの光はゆっくりゆっくり強まり、そして風は彼女の湿った羽を乾かしていた。しかし彼女の身体はその時間、太陽をより必要としていた。

…彼女は空に登り、大きな花に身を再び任せる前に、その近くで温かい愛撫のお返しを楽しんだ。

「花よ…」、忘れてはいない言葉に答えた、「ありがとう… けれど私の色は自分には無意味…」 「私がまだ毛虫だった頃、二枚の普通の羽が欲しいだけだった。一瞬の間だけ高い処にいられるような二枚の普通の羽…」

さてその日は、その全ての色と匂いと共に、本当に始まっていた。その周囲により甘い香りが広がるままにしていた。

彼女はそれを感じた。その中に屈み爽やかな花蜜を味わった。

「…小さい蝶よ」彼女に優しく言うのを聞いた。「君は知るにはとても若い…」
「君には恐らく、しかし君の周りの世界は色が見えるだけ。
だからそれらに気を付けて…」

...

反論することは出来なかった。太陽は彼等の上に輝いていた。青い色の上に。黄色い花卉と金色の中心の上に。

「あなたを覚えておくわ…」
その時それに約束した。それは微笑んだ… 「森はとても大きい」彼女にそれだけ言った。
「一つの花はとても小さい…」
「行きなさい。」

「…行きなさい…」

それに触れながら、最後に彼女の羽を広げた。
その後去った。

...

後に残されて、彼女がゆっくり遠ざかるのを見ていた。

「私を忘れるだろう…
…けれど私には構わない…」

* * *

…小さな谷は急な高みで途切れていた。そちらに向かって飛んでいた。ただもう一度広がる森を見るために。彼女の視界が届く処まで緑の敷物が全てを覆っていた。

ところどころで小さな空き地が開き、時々平和な丘々を覆っており、そして時には高い灰色がかった高い岩々によって少し裂かれていた。

確かに、森はそれ程に大きかった…

一羽の蝶、そんなにも小さかった。

...

水晶のような川に着いた頃には昼に近付いていた。

その音は石の川辺を舐める間も邪魔をされることなく拵がっていた。最初は明白で、その後遠く——最後

にはとどろく記憶に似るまで… 恐らくそれは徐々に彼女をその傍へ引き寄せた。

その時それが絶え間なく通り過ぎるのを見た…

「何処へ行くの？」その上を飛びながら尋ねた。

しかし川は多くのお喋りをする気分ではないように見えた。

「知らない」彼女に答えた。

そして休まずに流れ続けた。

彼女はこだわった。それに従い、微笑み、そして再び試みた。

「…不思議に思える、せせらぐ川よ…

そんなにも急いで、何処へ行くのかも知らずに…」

今度は川は立ち止まった、不思議な出来事。

そして恐らく少し怒った。彼女の執拗な問いに。怪しい笑い。

「誰も何処へ行くのか知らない」その後言った、多分真面目に。

「…君は知っている？」

小さな蝶は全く喋らなかった。ただ黙って飛び続けた。しかし考えたことがない程恥じた… 彼女には教訓になればならなかった！答えを知らずに尋ねてはいけないと。しかしその時また、何故尋ねる？

「私は」、恐る恐る弁解した、「少し前に生まれた。何処へ行こうと、初めて。けれどあなたは、そんなにも大きい、何年も今まで何処かへ行っている筈。」

彼が黙る番だった。まるで決心したような——考えた後——もっと真剣に考えることを…

ある深い開口部へと穏やかに流れ込んでいる、その岸を開くのを始めたような。

こっちへ曲がっていた。あっちへ曲がっていた。

それは色彩も変えた。

しかし再び知らないで結局答えた。

「唯一覚えているのは」、続けた、「山の何処から出発したこと。そしてそれはぼんやりと。

何処に行くかに関しては、良いということだけ知っている…」

「何故？」

「…しかし… 決して後に戻らないからだ！」突然笑いながら答えて再び走り始め、大きな下り坂で泡を立てた。

…

小さな蝶も笑い、そして彼女の笑い声はそのせせらぎのように聞こえた。

「君は何て特殊なの！」それに言って、残りの全てを忘れたかのようだった。

「森をあなたの綺麗な色で飾っている。」

「色は無い」彼女に答えた。「必要ない…」

一でも…

一自分の上に屈むものの色を映す。そしてたいてい

空の色。

「自分を本当に美しくするものは、しかし、自分の動きだ。」「…だからずっと流れている」、続けた…

「ご覧…」

それに話すのすら間に合わなかった… その岸は狭まりつつあり、そしてそれはその身体がますます速くその間に流れるのを感じた。風のように、その中で浮上する石を、巻き上げ、枝々や落ちた花卉を集め、小さな滝に贈り物を積んで最後には到るまで。

「本当」

それが細く透明に落ちて無言の音に降伏するのを見る傍ら、再び静かにせせらぎ始める前に、小さな蝶は呟いた。

…

彼女は大きな川を見守ったのをそんなにも喜んだ…

そしてそれは自分が小さな蝶に付き合ったことを喜んだようだった。穏やかな坂で、大きな開口部で、淵と小さな滝で。

それまで誰もがその経路の一つの湾曲だけを見つめていた。

「青い蝶よ…」 やっと彼の番が来て微笑んだ、「言っておくれ… ところで森を知りたいかい？」

「ええ」、囁いた。

「ならおいで…」

「先ず他の何かを知らなければならないだろう…

そしてあれ… あれ、君に見せられる、自分だけが。」

ある一日だった、森のあらゆる日々の暮らしのような… その音は調和的に枝々の沈黙を包んだであろうし、そして潤いのあるその美しさを更に拡大しながら、それらの不動は常にお供となっていた。

岸の何処かに放り出されていた一枚の緑の葉をその真ん中に取り出した。その水は静まった。まるで止まったかのように…

「おいで…」再び言った。

低くその上にひらひら舞って、そしてその後、半分沈んだ葉に用心深く身を任せた。

「怖がらないで」川は言った…「近づくものは誰でも自分を怖がるが、君は自分の近くにいる時は怖くない。」

「怖くない…」応えた。

「さて自分の中の深みを見つめて… 何が見えるか言ってごらん…」

小さな蝶は前に屈んだ。「見える…」
しかし何も見えなかった。
もっと屈んでもう一度試みた。
「見える…」ためらいながら言った…

川はより広くなり、浅く、しかし巨大な木々がその石の道を覆っていた。曲がった体をその上に伸ばし、そして大量の枝々と無数の葉がますます厚くなりつつあるかに見えた。最後に太陽が暫し身を隠したと思えるまでに、そしてその無色は影の世界に消えた。

全てが意外にも不思議に思えた…

何も変わらなかった、しかし何も同じに留まらなかった。一息の涼気がそれらの周りに広がったようで、明るい色の葉を装う濃い緑、土の岸に素早く影を落とす明るい色の花々…

その底は暗くなり、そして小さな青い羽は徐により温かい色彩へと濃くなった。

…喋るのをためらっていた。たとえ水はまずその中で形をなして以前のように穏やかに流れるまで、これまでになく… 葉と枝々はそれらの底に流れていっただろう。空の破片が落ちたであろう、それらの上に燃えながら。そして半分沈んだ葉は一気に沈んだかのようにだった。

そこ——全ての隣に——川の流れに降伏し、ゆっくり… ゆっくり青い蝶が旅していた。

「…自分が見える」、やっと言った。

…

ずっと本当に知っていると思っていたが今初めて、自分の一部だけを見ていると感じた。

彼女の小さな川、静かな滝の少し後、彼女の羽の形

全体が見えただろう。柔らかな、穏やかな、森にぶら下がる葉のように。滑らかな、透明な川の水のように。

…彼女の小さな身体。前に比べてどれ程変わったか… 重くもなく。動き辛くもなく… 軽く、今や呼吸して風を通り抜ける。

四肢は細くて長い。開いた花卉に辛うじて触れるぐらい。

そして二本の触覚は彼女の世界の境界で揺れていた。休むことなくそして疲れを知ることなく。話し合い、意義を唱えて時々お互いを笑う。分離されしかしまさにその始まりを結合する。

最後に、彼女の青い色。咲く花々を飾るそれは今や静かに広い川に滑って行った… 絶え間ないその涼気を黙って吸い込み、そしてその中でそれらは温かい天上の美を滴らせていた。

それらの中深くに森の歴史を隠していた。そしてそれらの周りあちこちに、振り撒いていた、空の輝きを…

…

「ありがとう」囁くように小さな蝶は行った。

…彼等の周りには唐突に深い森、彼等を絶え間なく暗い半影で包んだ…

折れた枝々、無力に落ち、水面を裂くだけだった。

そして向こうには一つの蝶の群れが、それらの沈黙に身を任せ、現実離れしたように、追われて開いた花々に隠れていた。

…葉はそれらに向かって引かれているようだった。川の真ん中から離れて一番近い岸にもそっと寄りかかった。

「自分も君に感謝する…」暗い川は答えた。「蝶たちはとても美しい、飛んでいる時は。」

「だから飛びなさい… 決して止まらずに…」

「今は彼等の近くに行きなさい」彼女に乞いた…

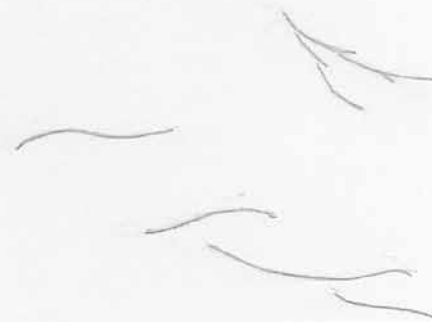
空に登った。その上に最後にはばたいた。

「あなたが何処に行くか私は既に知っている…」、永遠に去る前に、それに優しく言った。

「何処へ?」、その時悲しげに尋ねた。

「…何処へ行こうと…」

背後で葉は滑り、再び川の流れへ… そして彼女は他の沢山の蝶たちと一羽として加わった。



* * *

彼らが彼女の隣を飛ぶのを見ていた。
美しかった。

誰も想像できない程。その周りの影を寄せ付けず輝いていた。儚かった。誰も気付かぬほどに。繊細な羽。しかし彼女は振り撒かれる風を感じた。

他のは自在に同心円に飛んでいた。別のは、沢山が同時に、奇妙な形に角を形作っていた。あるものは色彩に従って分かれていた… 幾つかの赤い雲がそれらの動きにつれ身震いしていた。

幾つかの白い星雲が広がりそしてその後大きな球体に集まった。

誰も彼女の小さな羽に注意を払わなかった。誰もが自分たちの羽を気遣っていた。

そして誰も彼女の青い色を識別しなかった。そんなにも沢山そこには青い蝶がいた。

誰かが彼女を近くに呼び寄せた。新しい遊びに加わるようにと。しかし小さな蝶はとても呆然としていて応えなかった。そして繊細な花に身を任せた時、ある青い蝶が彼女の隣に来た。

「ようこそ」彼女に言った。

彼女は直ぐには答えなかった… 二羽の蝶は、ずっと離れて、一頭がもう一頭の周りを飛びますます高く昇り、空に向かって登る一本の柱を形作った… その後別れ、再び一緒になってまた始めた。

「あなたたちは皆そんなにも綺麗…」 やっと応えた。

「動きで世界を飾っている。」

「私たちの傍にいなさい」彼女に頼んだ。「飛ぶこと自体は何も意味しない…

私たちがどうやって飛ぶかを教えるから。」

何故か解らないまま、小さな蝶は恐らくその言葉に居心地の悪さを感じた。彼女の周りの半影が急に彼女を疲れさせたようだった… そしてこの蝶たちは同じ飛び方で、彼女を麻痺させそして忘れさせるようだった。

「ごめんなさい」、優しく答えた、「でも残念ながら行かなくちゃ… 森を知らなくてはならない。」

「森には知ることなんて何も無い」彼女に言った。「畏だけ。私たちの傍にいなさい、青い蝶… 私たちの傍にいなさい、そして永遠に生きるでしょう…」

しかし小さな蝶は他を聞こうと留まらなかった。も

う一度礼を言って、濃い群葉の向こうへ高く飛んだ。

繊細な花の背後では一羽の蝶が波打つはばたきの深い曲線の中に身を委ねた。「私たちは森全体」ただ囁いた。

「私たちの世界を知るものは皆、いつか私たちの元へ戻る。」

* * *

森にその一部を残していた。色とりどりの空き地を後にしていた。草むらとそびえ立つ木々。

それらの細い幹の周りをぐるりと回ってその後去った… 一瞬それらに触れ、再び風に乗る前に羽を開いた。

行く先に洞穴があるのに気付いていた。

休もうと青々とした地に下りた。

…太陽は水平線に沈みながら変わりつつあり、そしてそのように雲も一緒に変わりつつあった…

見たこともないような群葉を捜し求めていた。芳しい花々に、止まりつつ続けた。

…空には深い青が広がっており、そして彼女の小さな羽にも。日は見えかかり、それでも一方で彼女の周

り全ては今や色を失いつつあり、全てが隠された形を現すように思えた。

彼女の前、小さな空き地の、殆ど真ん中に、一本の木だけがその暗い輪郭を堂々と直立させていた。

しかしその木は何か違うものを持っていた…

何か、今まで他の木には感じなかったもの。

…

…その根は周りに広がり、そしてその後緩やかに土に沈んでいった。その細い枝々は、逆に、ゆっくり空に向かって上がっていた。

しかし一枚の葉も、花もそれを飾っていなかった。

枯れて、無言で不動——春の森の中には似つかわしくない——その木は命がないかのようだった。

そして更にもっと奇妙なことに、生きていたことがなかったようだった…

青い蝶はその近くに飛んだ。

僅かな光がまだ照らす処、木はその上を幾多の季節が通り過ぎたことを表していた。恐らく全て。まだどれだけか、誰が知るだろう、過ぎるだろう…

「木さん」、その時優しく尋ねた、「何が起きたの？」

しかし枯木は答えなかった。

…その場所を夜の闇に譲りながら、日は暮れつつあった…

「木さん」、もう一度頼んだ。
「私に話して…」

その腐った幹の周りを飛んだ。
そこに時の痕跡を見た。去った冬は理由も無く痕を残し…そして捜していた春は恐らく決してそれには現われなかった。

二度と尋ねなかった。その木はもはや誰にも話さないと解った。

ただまだどれだけ持つかだけが解らなかった。どうしてまだ風に次ぐ風がそれを根扱ぎにしていなかったのか。

そしてどのように、まだその中にそれ程の温もりを隠しているのか。

「木さん」最後に言った。
「木さん、その日はやって来る、私の色の全てが君のために輝く日が。」

その周りをもう一度飛んだ。
夜をその近くで過ごすだろう。
そして夜明けの訪れと共に去るだろう…

* * *

月は現れ、半分、彼等に付き合うために。雲の間から覗き見て、その後乾いた枝々を青白く照らした。

小さな蝶は間もなくそれと共に我を忘れた。自分の羽が動く度にきらきらするのを見た。大きな木が銀色にその体を装うのを。

そしてそのように疲れた大地のベールを織りながら、彼女の周りの世界が臆病にきらめくのを。

星々は秘めた夢を思い出して宇宙の端で再び輝き始めた。そこには沈黙が戻り、決して去らなかった場所から、そして眠りがやがて森の思考を抱擁した。

...

…もう時間だった。

飛んでいる時間が延びたので、何処かにその小さな身体を休めなければならなかった。多くの枝の一つに近付いた。その上に身を任そうと降りた…そしてそれに触れようとした時いきなりある力が彼女を邪魔するのを感じた。

何が起きたか直ぐには解らなかった。ただそれから距離を感じるに留まった。

彼女の思い込み、或いは実際に何かが彼女を空中に保っていた？

彼女の小さな羽を震わせ！周りは至る処暗闇だった。彼女は止めた。再び試みた。しかし他に何を彼女は本当に起こると期待したのか？見えない糸が彼女の

柔らかい身体に絡み付いていた… 動く度に彼女の周りを締め付けた。そして彼女の二枚の羽は、素早く捕らえられた。

彼女は全く身動きせずに留まった。
誰も近くにいなかった。そして何も出来なかった。
半分光る月の元、ひとりで…

『森には知ることなんて何も無い』その時思い出した、或る蝶の言葉を聞かなかった… 『畏だけ』。

同時に振動を感じた。

急に強まる風のように、その身体を上下に動かした。糸の上を何かが歩いていた。そして何であれ、彼女の方に急いでやって来た。

初めて、小さな蝶はとても怖かった。

* * *

一つの奇妙な生き物が彼女の向かい側に佇んでいた。

その足は彼女が立つことすら出来なかった上を容易に歩んだ。その姿、多分丸く、殆どその夜に消えていた。

その目だけが遠くからも輝いていた。そしてその開いた口が暗闇にも関わらずもはや明らかに識別出来ていた。

よかった、誰かが周りにいた。
小さな蝶は、ほっとして微笑んだ！

...

「助けて、お願い…」、それが更に近づくのを見ながら言った。

「…この糸に絡まったの。」

生き物は止まった。その後一步後退した。その頭を横にかしげ、そして再び身動きせず留まった。

「助けて、お願い」、
小さな蝶はそっと繰り返した。
「気が付かなくてこの糸に縛られた…」

沈黙が広がった。暫くだれも何も言うことがなかつ

た。夜の生き物は、多分困惑しているように見えた…
その目は彼女の方を見ているようで、しかしその考え
は別の方に向けられていた。

ようやく話す瞬間言葉を見つけた。
ある大きな決断のように。

「何処から来た、小さい蝶よ？」低い声で尋ねた。

「森から…」

奇妙な生き物は黙ったままだった。彼等の周りの風
だけが月の青白い影と共に絶え間なくブツブツ言うの
が聞こえた。

「…それでもしかし、そこには属さない」意見を述
べた…

しかし小さな蝶は何を意味するのか解らなかった。

「自分が何か知っているかい？」続けて彼女に尋ね
た。

小さな蝶は川の言葉を思い出した。『誰も知らな
い…』と言おうとした。しかし直ぐにもう少し考え
た。そのようなことは快く聞こえなかっただろう、そ
してこのような時に…

「いいえ」ためらいながら答えた。

「…自分の網に絡まったものは、決して逃れられな
い…」

「最後にはいずれにせよ自分のものだったろう…」

理解するようには見えなかった。

「あなたがこの網を作ったの？」疑問に思った。

生き物は黙ったままだった。

「…何故？」

それは再び答えなかった。雲は月の視界を隠して風
は徐に森の果てで立ち止まった。

しなやかな枝々は身動きしなかった。青い蝶は無言
で遠くの地を見つめそして生き物は夜の色彩に消え
た。

寒気だけがずっと同じように留まった。

「私…

私があなたに食べられる？」それに尋ねた。

「生き物の体」応えた。

—私の羽は？

彼女の落ち着いた声に動揺を見た。

—心配するな。それらは、風に運ばれるままにす
る。

青い蝶はどうにか気を取り直した。

「ありがとう」それに言った。

「いつか森の花々を美しくしていた…　そして恐ら
くある日その近くに再び届く。」

...

生き物が彼女に近づくのを見た。そして星々が空の隅で震えるのを。

しかし時間が経ちどちらも身動きせずにいた。

「何を待っているの？」静かに訊いた。

「知らない」彼女に答えた。「何も…」
「…待つものなど今まで無かった…」

「それで？」

月は暗い空を旅していた。ゆっくり曇り空を通りながら森にぼんやりした光を広げていた… 夜の生き物は今一度我を忘れた…

「それとも、もし恐らく自分も何かを待っているとしたら、」その後囁いた、「もう現われないと知っている。」

…小さな蝶は不思議に思った。再び生き物は少しの間沈黙した。その視線は一瞬暗くなりそしてその後、恐らく失った光を取り戻したようだった。それでも彼女の方には向かなかった。

「かつて」ひとりで話し始めた「ずっと前に…」
「かつて森中を巡った。」

小さな蝶はそっと沈黙した。

「…知っている」、穏やかに続けた、「そのそれぞれの面を。」

「…その端、そしてその中心の荒涼に何を隠しているか。

その花々と大きな木々を知っている。せせらぐ川と小さな空き地を。」

その言葉は一度聞かれることを望むかのようにゆっくり流れ、そしてその後風に永遠に消えるかのようだった。

越す夜と、一つになるかのように。

「自分の糸は全てに広がると言われている。そして全ての物事の答えを知っていると…」

「しかしそれで？」

誰も自分を見たがらなかった。自分を聞くことを。

生き物たちは自分を彼等の考えと生活から追い出した、彼等にとってもはや手遅れとなるまでに。」

「ある日本当に去ろうと選択するまでに。

この木を見つけた、森のある忘れ去られた空き地に。

…誰もそれを直面したがらなかった。それと生きようと。

そして自分はその近くにずっと生きることを選んだ。

ただ決して誰が、或いは何がそれを枯らしたのか知らなかった…」

「しかし自分を哀れんだこの木で、自分をその懷に受け入れた… ただ寒気と自分の糸だけが覆うこの木で、常に何かを提供しようと望んだ。
だが、自分以外、他に何か知らなかった…」

「…今日まで…」

…

彼女の傍に更に近付いた。風は吹き細い糸は伸びていた、風のひと吹きで壊れるかのように。しかしこの風にそれらを断ち切る能力はなかった。

生き物は彼女の真上に辿り着いた。
小さな蝶は無言でそれを見つめた… 何を考えてよいか知らなかった。何が起こるのかも解らなかった。しかしそれがゆっくり高くなるのを見つつ、前足を威嚇して上げながら、初めて知る一つの感覚が脆い彼女の身体を一気に貫いた。
最後に見ることが出来たものについては、——ただ目を閉じる前に——その生き物が信じ難い力で降りてゆくことだった。そして彼女の上で、その爪の勢いを振りかざした。

…

彼女は風が再びあちこちに吹き付けるのを感じた。
…糸が引っ張られて彼女の横に落ちるのを。彼女の羽と身体がいきなり開放されるのを。

「行け」、夜の生き物はその時静かに彼女に言った。「君の自由、小さい蝶よ——感じる——この木への自分の贈り物。」
「もし望んだとしても、見知らぬ蝶よ、多分君を害することが出来なかっただろう。」

彼女は狼狽した…
「でも解らない…」

「必要ない」囁いた「恐らく自分もよくは解らない…」
「ただ行け！もうすぐ夜が明ける、小さな蝶よ…」

自分の姿を見る前に行け！」

月は低くなりそし手夜は今夜その終わりに至った。

「あなたはもう怖くない…」それに言った。
「…そして私の青い色を見て欲しかった。」

「何も見えない」悲しげに話した。
「自分は盲目だ。しかし自分の糸はそんなにも細く、全てを感じることが出来る。そうやって君の小さな身体を認識した。そして君の大きな羽、小さな蝶よ。」

恐らく沢山あったに違いないが、しかし何も言うこ

とが見つからなかった… 月の最後の明かりの中風の音楽と共に、ただその周りを飛んだ。

「行きなさい」奇妙な生き物は彼女に言った。「もしいつか自分の糸の抱擁を欲するなら自分はここにいるだろう。しかし気を付けるんだ、青い蝶よ…」

「本当の死、これから行く先で待っている。
そしてそれは…」

それは、君の身体だけを望んでいるのではない。」

小さな蝶は急いで去った。
彼女の前は、夜明けの光、薔薇色に明けていった。





* * *

それを見た、まだそれから遠い時に。

小さな高みに上っているのを…

…その数少ない塔と。尖った屋根と小さな窓。

その周りには森、丘に続いて、ゆっくり下がって奥底に消えていった。最初は木々と花々の色だけに。それから朝の雲の暖かい反射に巻き込まれて。やがて山々の灰色と一つになるまで。

沈黙。孤独。

太陽はその中で昇るようだった… 再び最初から支配し身を委ねるように。

…その塔の一つの側面にぼんやり現われ、徐々に空間と続く角を多い、大きな城を優しく満たした。

そしてその時——悔いるように——その割れた欠片を集め、森と高い城壁を後に残し、そして一気に空の雄大さに戻った。

...

…空き地と空き地、その続く道を、彼女は通り過ぎた。例え近くに思えていたとしても…
またと見つからぬような木々を後にして。
彼女を呼ぶような花々を。

しかし近付くにつれ、それは向こうへと引かれて行った…
時間は流れていた。太陽はより高く昇っていった。
彼女の行く手には全てが少しその近くで休むよう近付くのを求めている。しかし立ち止まる時間はもうなかった。
そして着いた時、それらの巨大な形の景色に躊躇しなかった… 風に従いその天辺に登った。

彼女の前の木々は、それらの細い枝を掲げ、そのように彼女の邪魔をしようとするかのようだった…
「進まないで、青い蝶よ」 どれかが彼女に言った。

「…この地を横切ろうと選ぶ者は誰でも、
森にはもはや決して戻らない…」 他が続けた。しかし彼女を押す風は彼等の言葉より強かった。

それらの真上で、城のイメージに彼女の視線を広げながら、一瞬宙に留まった。そしてその時、小さな羽の一つの動きだけで、とうとう石の城壁を越えた…

そこだった。

* * *

その手は脆い花々の上を触れていた。咲いたばかりのもので、彼がそれらに溢れんばかりの世話をした。

その目は直ぐに彼女に落ちた。
沢山の匂いをさまよう間…
太陽の光線に、色彩が変わる間…

…その唇は静止した。
喋ろうとしたが、何も言うことが出来なかった。彼女は彼の満開の庭々で踊っていた。数多の種類の花々の間で… 数多の蝶の間で。

彼女に歩み寄った。
ゆっくりとした歩みで… 注意深く。怖がらせまいと気を付けながら。

ある花に止まっているのを見た。
…更に近付いた。

…庭々は眠れる城壁から延び、城本体へ… 美しい茶色と赤の石で築かれた一つの建物。巨大な。アーチ上の窓々と一つの大きな、鉄の門。

小さな姿が彼女に向かって歩み、殆どその前で消えた。しかしより近くに来るにつれ、より大きくなり続けていた…

彼の外観は彼女に森の生き物を思い起こさせなかった。しかしまた、あれらとは違うことはあり得なかった。

彼女に彼にとっての一番大きな微笑を見せた。
彼女は青い羽を開いたり閉じたりしたが、逃げなかった。

落ち着いて、若い王は更に近付いた…

* * *

彼女の真っ直ぐ前に、不動で留まった。彼女の全身の姿は彼の目を和ませた。

「…私の城にようこそ、小さな蝶よ」彼女に言った。

その声は馴染みがあるものに聞こえた、優しい声…時間の経過は刻まれたかのようだった。

彼女は答えなかった。美しい色彩の蝶たちは彼女の横を通り過ぎて行った…

「君は歓迎されている」ただ続けた。「私達の近くにいてもよい、好きなだけ。」

…蝶たちの幾つかは彼の肩に少しの間とまった。彼等の蜿蜒たる道が続ける前にその波打つ髪に触れた。

「少なくとも今日は泊まって休みなさい。」

「君が何処から来ているか知らない、小さな蝶よ、

君が何処へ行くのかも知らないと思う、だが疲れているのは間違いなく知っている…

私の城の花々は、今から君のものだと思っていい。」

その後彼の塔に向かった。

彼が去るのを見た、ますます小さくなりその中に消えるまで。現われた時のように、無言で。

そのように忘れられた…

...

空は以前のように温かかった…

咲く花々の間を再び飛び始めた。ある蝶たちは無関心だった。

あるものたちは彼女に注目した… 来たばかりだと解った。彼女を受け入れて彼等の美しい花々に休むよう招いた。

彼等の庭の木々に…

それぞれが、一つの花、お気に入りの枝を持っているようだった。

...

空気に漂う匂いは、容易く忘れられるようなものではなかった。花々の形もそうで、森では多分決して出会わなかった… そして彼らの羽… 彼らの明るい羽、大きな、似たものを見たことは一度もないであろう色彩と組み合わせで…

…一日中終わりにく飛んでいた。花から花へ。そし

て庭から庭へ、城の隅々まで。

...

そして彼女もある花の花弁に近付くほど。柔らかかった… そして休む頃だった。

その汁を嗅いだ… 魅惑的で、飲む頃だった。

その中に屈んだ。

そしてその上にもたれかかった。

全てのものたちに過ぎたように、彼女の第一夜だった。

* * *

時間は、今夜もまた気付かぬまま過ぎていった。太陽の愛撫に静かに目覚めた。
光に彼女の目をそっと開きながら。

その時は、若い王は彼女の隣だった… 恐らくずっと前から。彼女を待ちながら。彼女の動き一つ一つを気遣いながら…

「おいで」、彼女が彼を見るや促した。「今日、君に私の城を見せる日が来た…」
優しく、葉が吹く風に話すように。

しかし小さな蝶は当惑した…
「何故？」臆病にも思い切って尋ねた。

「しかし… 世界を知りたいと思っていた…」

…前に動いた。自発的のようだった。そして彼女はどのように断ることが出来たか？彼は微笑んでいた…

そして彼女は、どのようにそして何故無関心でいられたか？

様々な色の蝶たちは一羽一羽小さな花々で目覚めていた。王は全てにおはようを言った。彼らに自分の金の髪に触れるままにさせていた。彼自身の体の上で、彼らの身体を休めることを。

彼の周りを飛んでいた。そして彼は、透明な川の水のように平穏に、皆の夢を反映するかのよう…

小さな蝶は彼の肩に触れる勇気を見つけた。

一つの顔が微かに動揺した。恐らく一瞬息が深くなった。

…しかし無関心に道を進んだ。

* * *

貴重な彼の庭々の間を歩いて行った。近くに小さな蝶を伴いながら。

「私の城」、その時彼女に言った、「君が周りに感じ広がる城… 森の飾り。」

「君に見える花々は、その一番遠い端から運ばれたものだ。どれだけ探そうと、何処に止まろうと、これらのようなものに出会えるとは疑わしい…

私の蝶たちは、一番美しい色を着ている。
未曾有の色彩…」

彼女の方に軽く頭を曲げながら、静かに語った。そして彼女は彼の通る声に聞き入った。一度聞かれることで彼女の記憶にずっと残るのを望む言葉…

「…私の庭々ではそれぞれの蝶が休む花を見つけられる」、誇らしげに続けた。「他のどの花とも似ていない一つの花。贈る花蜜を、味わって…」

至る処に羨ましくなるような花々があった。
小さな蝶はその傍を飛んだ。

彼女の色は光の下に遊び、そして全身はただ彼女を見ながら輝いた。

一瞬だけ風の島々に身を任せ、そして急いで彼の肩に戻った。彼の姿は、再び曇ったように見えた。

...

…彼の庭の道は、不思議な形に交わっていた。それらを随分長く進みながら、意味なく彼はそぞろ歩いた。城へと続く道を進むまで。高く堅固な、鉄の門に。

「…それらを一つ一つ注意深く集めた」、述べた。
「最も珍しい、ここだけで見つかる…」

門の前に、そこへと導きながら、階段の小さな列があった… そして丁度その前に、もう一つの庭が広がっていた。

残りの庭々の隣に一つの庭。それらと同じ——恐らくもっと大きい——しかし奇妙にも違う…

…醸す匂いは表現不可能だった。そしてふたりを包んだ。しかし王はそれにもはや慣れていて…

「…枯れない花々の庭だ…」ただ囁いた。

...

小さな蝶はその上を飛んだ。明るく脆い花々がそれに満ち、薄く、無類の花弁が透き通るように… それ

は美しさそのものではなく、しかし彼等の近くで昇る期待の目覚めだった。

…それらの花蜜を味わった、それでも直ぐに彼の肩に戻った。

「毎冬」、言った、「雪が森を覆う時、私の家来たちはこの庭を覆った、混じり気のない水晶で…」

落ち着いて城への道を進んだ…

「…光は出来る、しかし寒さは庭の花々に触れない。

庭は枯れることを知らない。そして私の蝶たちは皆、ここに集まり、そして冬を過ごす…」

広い階段を登った。

そして彼等は大きな門をふたりだけでくぐった。

一日中、見事な城を彼女に見せていた… その詳細の一つ一つを注意深く。そして彼は——寛容に——、疲れも知らず。不満を言う瞬間もなく。

その内部、その庭々に値する、それらとのみ比較することができたであろう…

…高価なモザイクの床。

彫られた家具… 色とりどりの絵画。洗練された織

物。精巧に鑄造された金属。火の消えた暖炉と燃える松明…

忍耐強く彼女に歩いて回って全てを見せた。広間から広間。階から階。そして塔から塔。
一つだけ別の日のために残して…

…

そうして、夜が来ると、小さな蝶はイメージを背負って眠い庭々へ戻った。
彼女の脳裏にある小さな言い回し、眠る前に再び巡っていた…

「…私の庭」、彼女に言った、
「…森の飾り…」

* * *

翌日、小さな蝶は、ひとりある花の上で目覚めた。辺りを見つめたが、彼女の隣にいなかった… そこで城へ向かって飛んだ…

沢山ある広間の一つに佇んでいるのを見つけた。小物の位置を変えながら… のんびりしているように見えた。そして多分少し無関心、彼女が彼の方へはばたいているのを目にしても。その後待っていたかのように微笑んだ… 来るだろうと既に知っていたように。しかし彼が聞いた言葉は聞くと思っていたものではなかったに違いない…

小さな蝶は黙って家具の一つに止まった。

「お別れを言いに来たの」彼に言った。
「今日、去ります…」

…

朝の涼気が彼の城を満たした。まだ春の盛りの日…

静かに話した。しかし彼は彼女の言葉一つ一つを感じた。

何をしようが、さておいて、そして彼女に自分の視線を留めた。彼の唇から微笑みは消えなかった… ただし今はどこか変わっていた。

「何故?」、訊いた。

慌てて答えはしなかった。多分彼の感情を少しも損ねたくなかったから…

「ただ森を知りたいだけ…」

王は軽く笑った。しかしそれでもまだ、彼の笑い声は不意にその場を満たした…

「森？」不思議に思った。

「…それならここに残らなければならない！」

「私の城は森そのもの… これまで私の庭々の花蜜を味わったどの蝶も、常にそれを求めた。

彼女たちに訊いてごらん。だから喉が渇いている、足りることなく…」

「疑いはしない」、彼女は認めた、

「でも、ごめんなさい、私の去る時が来た…」

彼女に向かって歩み始めた。

「ある花を探している、私の庭にない花を、そうじゃないのか、小さな蝶よ？想像しているなら言葉で表してくれ、そしてもし見つけたら言ってくれ、それを君に持って来る…」

「いいえ…」

「いいえ、それじゃない」断言した、恐らく動揺して。

彼はぼんやりと価値のある自分の城を見た… もっと近付いた。しかし彼等の距離はますます広がった… 彼の目は彼女の青い羽だけを映していた。そしてそ

れらは拡散する光を映していた…

彼女の前に今一度辿り着いた。再び微笑んだ。

「君の言う森、ある日冬がやって来て終わりが訪れる。しかし私の枯れぬ花々の庭は、春のままで生き続ける…」

まるで大理石でできたかのように、全く動かずにいた。彼女を見守りながら。彼女の動きの一つ一つに注意を払いながら…

「…私達の近くにいなさい、小さな蝶よ…」

君の森ではまたひとりになる…」

彼女が床を見つめるの見た、まるで考え込むように。

彼女の青い羽を広げ始めた… 軽く細い身体を下げた。彼の唇から微笑が消えた。

「ごめんなさい…」、言おうとした…

しかし言い終えるのに間に合わなかった。

彼の手は瞬く間に動き、恐らく理由も無く…

彼女に覆い被さった、躊躇うことなく、風と太陽の光を奪いながら。

…

何が起こったか直ぐには解らなかった… 一瞬逃げようと試みたが、それは彼女の周りを一層締め付けた。

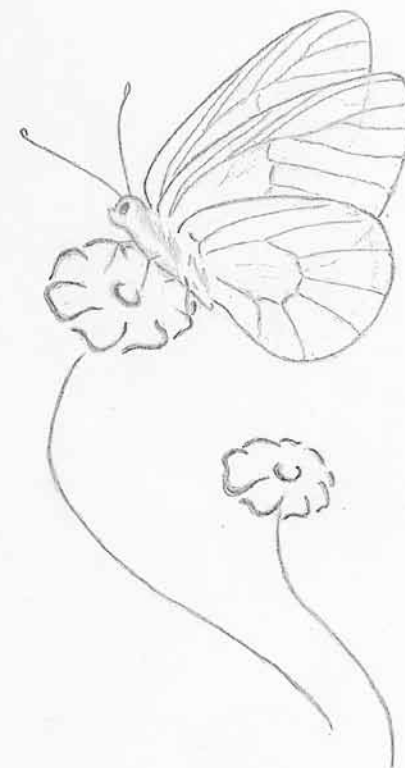
…身体と小さな羽を捕らわれて。

彼の指の開いたところから中を見た。
奇妙な生き物が彼女の向かい側に佇んでいた… 彼の顔は若い王を思い起こさせなかった。しかしまた、どのようにそれが違っていることができただろうか…

「すまない、小さな蝶よ」その時声を聞いた。
「とても努力したが…
しかしお前は、理解しなかった…」

彼女の力が失われてゆくのを、そして周りの世界が消えてゆくを感じた。

「…痛い…」、
ただ言うのに間に合った。





* * *

どれだけの時間が経ったか知らなかった。
気が付いた時周囲の場所すら認識できなかった。

小さなガラスの壁の瓶に閉じ込められていた。疑いなく城の何処か… 円形の広間。塔の広間のように、しかし見たものより大きかった。
そして確かに違っていた。

大きな、殆ど空の広間だった。城の残りとは反対に、調度品は多分僅かだった。そしてそれらもまた中で忘れ去られていた…

そのどれか隅の一つの小さな長櫃。消えた、忘れ去られた暖炉の隣… 高い、丸い小さなテーブルの上に彼女の透明な瓶が置かれていた——大きな部屋の真ん中に。

二本の松明が壁に取り付けられていた…
重い肘掛け椅子が一つ、無関心に向けられて。

全てが窓のある壁に向かって集められていた。その広間唯一の窓。光の中で開けられた。

…

大きな寂れた広間、城の残りとは反対な。
そしてもし恐らく何かが開いた場所を埋めるなら…

カーテンだった。広げられ、波打って、もう半分の残りの側に——開いた窓のない、向かい側。

小さな蝶はその間にいた。

* * *

王が来た時、殆ど気付かなかった。部屋から出る階段の最上段からゆっくりと現われた。螺旋状の階段、残りの塔からとみなして。

…石の床の高さに到ったとき、彼女に近付きながらその上を歩んだ。

落ち着いていた。

彼女の入った瓶に向かって軽く屈んだ。彼女の隣に顔を運んだ。「気が付いたかい…」独り言を言った。

彼女は答えなかった。その代わりに背を向けた。しかし王はいきなり小さな瓶の向きを変え、そのように彼女が彼の方を向くことを余儀なくさせた。

初めて、小さな蝶はそんなにもはっきり彼の目の海に自身を映し出した。王は彼女を見つめ続けた。

「…君にもう一度チャンスをあげよう」彼女に言った。

暫く黙って、そしてその後幅広い布のカーテンに近付きながら遠ざかった。片手でその端を強く掴んだ。

「私の近くにいなさい、小さな蝶よ」再び彼女に勧めた。

「私の近くにいなさい、そして私の城全部、多分いつか君のものになる。」

閉められた蓋の隙間を通して、彼女の声は彼に届いた。

「あなたの城全部、私には異質だ」言っていた。

「…そうかい」、言葉短く確かめた。

「それなら自分が何処にいるか知らなければならないだろう…」

ゆっくりした歩調で、高いカーテンを引きながら、壁に平行に歩んだ。

…彼女の身体は凍りついた… 彼女の声はその前は恐れを知らぬように聞こえたが、今は彼女の中深くに隠れた。そして彼女の目、彼を追う目、直ぐに開かれたままもっと後ろへと忘れ去られた。

多分部屋のもう一方の端に至った、隠れた壁を殆ど頭にしなげら。

「君は…」、冷静に続けた。

…

彼女の息は消えるかのように吐き出された。彼女の

周りに命が不注意にも散らされるかのように… 一瞬の間、包まれて。

…彼女の前の壁に、広がる巨大な壁に、大小の額が至る処に掛けられていた。そしてその中には、同じ形の額の中には… 数十の色と太陽の光をまとった、蝶たちの羽が身動きせず輝いていた。

身体は、最後のはばたきに明け渡されていた。

「…私の一番美しい広間にいる…」

* * *

世界全体は彼女の為に空になった。

対照的な額の中の羽だけが彼女の前にあった。他には何も… 低いところから始まる額、床からほんの少し上から。高くまで届き、殆ど壁の一番高い処に届いていた。他には何も。

若い王は彼女の隣に戻った。

「私の全ての申し出を断った、小さな蝶よ」彼女に言った。

「しかし今選択の余地が無い…」

…私の近くに生きる。

私の城の城壁を決して越えることなく。

そしてずっと私のために飛ぶ。

でなければ、一部になる、私の壁の蝶たちの…」

失った話す力を見つけるまでに彼女には恐らくかなりの時間が経っていた。

「決して…」静かにただ彼に言った。

「決してあなたのために飛ばない！」

…

ただ微笑んだ。

「そんなに急ぐな、小さな蝶よ。」

「…時間は、

全て私たちのもの…」

* * *

再び来るまでに、数日が経った… しかしどれだけか、もはや解らなかった。

静かに壁を見つめながら経った日々。あの額——様々な大きさに、中に少数または多数の蝶たちを閉じ込めた。

あの羽… 同じような羽を二度と見なかった…

光の戯れにきらめく色彩。光が開いた窓から入り、大きな広間にあふれ閉じ込められた…

その向こう、雲と風だけが流れ… いつでも遠くへと去り行くであろう雲。

そして風は時々彼女の近くまで届き、彼女の寂しい考えのお供をした。蓋の小さな穴々から中へ通り、そして彼女の悲しむ顔を撫でていた。

どれだけ本当に不思議なようであったか…

いつかどれだけ簡単にあの隙間から滑り出ることが出来ただろうか… ほんの小さな毛虫だったころ。そして今尚、もし彼女の大きな羽を持っていなかったら… それらは、ずっとあこがれの羽、彼女がそうであるようにしたそれらが、今や彼女をここまで到らせそしてもう決して彼女を逃げさせない。

...

王はある甘い春の午後に来た。最初の時のように。ゆっくりと螺旋階段を登って早く彼女の近くにきた。そっとその手に小さな瓶を掴んだ… 彼女は全く反応しなかった。

暫く彼女を見ていなかった。それでも続けて、かつていたそこに留まっているようだった。

「かつて私の庭を軽蔑した、小さな蝶よ」彼女に言った。

「恐らく今は、考えを変えたか…」

開いた窓へと、彼女を連れて行った。城の最も大きい窓の一つ。瓶を窓枠の端に置いた。その後両手をついて軽く外へ向かって体を屈めた。

その下には鉄の門があった。

彼女の丁度前、枯れない花々の庭、届く匂いを拡散しながら、ぼんやり、そこまで。

その向こうには花咲く庭々。美しい木々。それから城の城壁。そしてその後は森… 茶色と緑… 広大な…

小さな蝶はガラスの中から見つめた。

王の視線は遠くへとさまよった。

「私の城は美しいだろう？」次に尋ねた…

「森の真ん中に建てられた… そして君はその壁まで飛ぶことが出来るだろう…」

答えなかった。

「どれだけ本当に不思議か」その後言った。ゆっくり話した。彼女を見ずに…そして彼の考えは誰が何処へと知ることもなく失われた。「どれだけ不思議か、小さな蝶よ…」

「かつてこれらの城壁は、敵を妨げた。戦争と勝利、弾と炎を受けた…私の城の地下は今でも火薬で一杯だ、決して起きたことのない戦いのために…」

今日までこれらの城壁は自分にとって役立たずだったようだ——臆病に微笑んだ…他の誰も待っていない。

…そしてもう私の蝶たちを妨げていると思う過ちを犯さないように…

いいや、彼らのだれも逃げようとは欲しない。

彼らはただ私のかつての城を飾るためにいる…過ぎ去った時を思い出させながら…」

「しかし今もはや君を妨げている、小さな蝶よ。今は、再び役に立っただろう…」

軽く笑った。美しく笑った。

「私の庭々をもう一度ご覧、小さな蝶よ…」続けた。「今なら見えるだろう、何故そんなにも素晴らしく見えるのか？」

蝶たちをご覧、今や何も彼らを制限しない…毎冬私の枯れない庭に自ら隠れている。そして毎春、その周りで高価な羽を広げる。生きるために他の別の庭を選ぶ…或いは同じ庭を、構わない…

美しくはないか、小さな蝶よ？

美しくはないか、彼らを高みから見るのは？」

彼の大きな塔の内側へ戻った。

「さて？」、彼女に尋ねた、彼女を色とりどりの壁の前に運びながら…「さて、小さな青よ？」

「私の広間にはいつだって他の蝶たちも納まる。花咲く私の庭々も同じ…選びなさい、何処にいたいかな…」

望まなかったが彼の方へ向いて見つめた。

「何故？」、彼に尋ねた。

...

王は当惑した…誰も予想しなかっただろう、彼女が疑問を持つとは…「どういう意味だ？」彼女に尋ねる番だった。

「あなたの壁と庭にはあるでしょう」、はっきりさせた、「そんなにも沢山の青い蝶たちが…」

私は、何かそれ以上あなたに提供することが出来る？」

慈愛に満ちた表情で彼女を見つめた。そしてその後静かに視線を他所に向けた…

「意味は無い」彼女に答えた。「意味は全く無い…」

「しかし私も——ずっと昔——そうして君も理解に時間がかかるだろう。君に言わなかったのか、さてまだ感じなかったのか？私の城壁を通るものは誰でも、決して逃げない…決して戻らない…」

理解しなさい、小さな蝶よ。
 …早く理解すればする程、もっと早く太陽を拝める。」

去り際に花を一つ取り瓶に入れた… 「来る日々のために」彼女に言った…

蝶は彼女のために花を折らないよう願った、そしてそこに閉じ込められていることで、食事の必要があまりないと… しかし去って行った、多分彼女を聞かず。

訪れた日々は終わり無く思えた。花のように彼女も話す気などなかった… ただ広い部屋を見ていた…

…時間は、何故そんなにもゆっくり過ぎてゆくのか？

放置された暖炉。二つの松明、隣同士に据えられて。重い肘掛け椅子。小さな長櫃、中に何が仕舞われているか誰が知るのか…

多分時間はそこで止まった。

…無言の壁の悲しむ羽を見つめた。広げられた羽、しかし決して飛ぶことのない羽… 太陽が包んでいた。

しかし光を感じることは決してなかっただろう。

...

王はいつものある一日のように戻った。

彼女は疲れていた。彼女が枯れた花の上に目を閉じて寄りかかっているのを見つけた。花蜜には全く触れていなかった。

彼女の近くに行って、小さな瓶を振った。

彼女は起き上がった…

「さて？」直ちに彼女に訊いた、もう一度。

「決心したかい、小さな蝶よ？」

「私は永遠に待てる…

しかし君は、その前に死んでしまうだろう。」

多分もはや何をする意思もなかった。しかしそれでも答える勇気を探した…

「あなたのためには決して飛ばない」彼にまた言った。

「そして選ぶ理由が見つからない、二つの同じ牢屋で…」

もし話している時小さな蝶が彼を見つめていたら、彼のかすかな微笑が固まるのを見ただろう。けれどその可能性を理解しなかっただろう。

「同じじゃない！」怒って言った。しかし直ぐにその声の調子を落とした。

「ここまで辿り着いた…」打ち明けた。「君に贈り

物をする価値があると思う… 君と分かち合う、ある秘密を。」

…

小さな瓶の周りを歩き始めた。恐らく空っぽの広間で唯一の動き。

「君の決断を楽にしなければならない…」認めた。

「そして一つの小さな、無害な過ち、君の判断を邪魔する、青い蝶よ。」

「かつて君に話した、私の庭の蝶たちのことを。その時が来たと思う、君に壁の蝶たちのことを話す時が。」

考え込むように見えた。静かに見えた。

彼女の周りを動き続けた…

「…確かに同じだと思うだろう、何故なら同様に美しい、そうじゃないか？」

小さな蝶は何か言おうとした。しかしその後黙った方がよいと考えた。

「恐らくなるほど——気付いただろう——この壁は、私の庭に比べて、有利だ。」

「…実際、それを飾る蝶たちは」、確かめた、「かつて私の満開の庭々を飛んでいた中でも最も美しい。

彼らの色がまだ光の中で輝くのをご覧…

選ばれた色彩、最良の色彩から。」

青い蝶は時折若い王を見つめた。そして時には彼女の視線は色とりどりの壁へと泳いだ。

「知っているか」言った、そして一瞬止まって彼女を見つめた、「そして私の庭の蝶たち… 永遠には生きない。」

「季節から季節の後、誰も隠れることのできない冬が来る…

その時、彼らにその時が来る、私の壁だけが彼らを守ることが出来る。」

「今君は解ったと願う、小さい蝶よ…

…彼らの羽は私の遠くで失われていただろう。

恐らく既に決して創られなかったかも知れない。もし私の庭々の花蜜が彼らに命を与えていたら… そしてかつてもっと丈夫な身体で飾られていたら。

もし私の枯れない庭と季節の特別な光が、彼らの羽に完璧な美を恵んでいたら、とても美しい色彩… その時本当に出来る、そしてここに到った。

私のこの壁、彼らのために、永遠に。」

「私から永遠に遠く全てが失われていただろう…」、ゆっくり繰り返した。

「私は、彼らには到達し難いものを与えた！」

青い蝶は寒さを感じた。

しかし朝の太陽は焼けるようだった…

「でも君は間違ってもいる」彼女に言った。「まさにここに彼らの違いの源もあると解っただろう。いや、君が見る壁と私の庭は同じではない。」

「この壁は終わり。私の庭々は、始まりに過ぎない！」

...

「…選ぶ権利がある。
今からこれに加わることを望むことも出来る。或いは、先ず私の花々の花蜜で酔うのを選ぶことも。」

「君には選ぶ権利がある、小さな蝶よ。
だが決して逃げることは出来ない！」

彼は瓶の花を取り替えた。そしてその後立ち去ろうとした。立ち止まって振り返り彼女を見たとき、階段に到っていた。

「思っているだろう」、彼女に言った、「私の壁の蝶たちは、抵抗したと？」

「或いはひょっとして彼らを騙したと？」

「…少数のものは私の壁を評価しなかった、小さな蝶よ。

殆ど全てが、もしそれについて知っていたら、直ぐにでもその近くにいたがっただろう。

だから秘密にしている、小さな蝶よ。その位置は、或るものにとっては幸運だ。」

「さて？
私の壁は今美しくないか？」

「ただ命を恵むことだけ出来る今？」

…訪れた日々はまた果てしなく思えた。多くに違いなかった… 彼女の花は枯れた。

彼女に最後の花蜜を供給した… 彼女はそれを飲み、奇妙にも、生き続けるために。

彼女の脳裏には他の別の花も巡っていた。かつて彼女に色に気を付けるよう言った一輪の花… そして彼女は周囲の色彩に注意した。しかしこの広間でこれらの色は死を意味するとさえ言えただろう。

かつて彼女に動きを見せた、一つの川を思い出した。そして彼女は見ていた動きに注意した。しかし花咲く庭々の蝶たちのはばたきは、命を意味するものではなかっただろう…

夜の生き物、彼女の大きな羽だけを感じることが出来た… しかし彼女の前の蝶たちの羽は、とても大きかった。果たしてどのようにあの壁に辿り着いたのか？

果たしてどのようにあの庭々に耐えたのか？

どのように？

...

日々をひとりで費やした。黙って。王はやって来ては花を一輪残して去って行った。いつも彼女に同じ事を尋ねた。時々答えた。時には話すのにとっても疲れていた。

最初の頃のように小さな瓶はもはや狭くなかった。彼女は近くのガラスの壁と遠い蓋に慣れた。彼女の周りの空間… 暖炉、消えた松明と閉められた長櫃。

そして恐らく見ている壁にさえ慣れた。あれにさえ。あの血塗られた壁に。

王は階段を登ると、ガラスの瓶の底にぐったり倒れている身体を見た。急いで彼女の元へ行った…

蓋を開け、乾いた花を取り出した後その中をそっと吹いた。彼の息は小さな蝶に命を与えるかのようだった。

軽く起き上がった。若い王を見つめた後再び目を閉じた。

「さて？」彼女に尋ねた。

答えなかった。

彼は音を立てず彼女の隣の床に膝をついた。蓋を開けたまま…

長い間彼女を見つめ続けた。そこで、倒れている間。

「…私の庭の蝶たちは私が全てを知っていると言う」、目的なく話した。「そして全ての物事の答えを…」

「何故私を拒む、小さな蝶よ？」

彼の声は彼女の周囲に温かく広がった。

「君が飛んでいる時」彼女に言った…

「君がその小さな羽を風に広げて太陽の光線がそれらを通り抜ける時、空の光を受けていた。

そして閉じる瞬間、——影が森の隅々を覆うよう

に——大洋の深い色を得ていた… それに似た色は森に存在しない…」

「私の近くにいなさい、小さな蝶よ…」

「他の誰も、君の美しさを見ることが出来ない…
恐らく君も。

私だけ…」

「私のために一瞬飛んで、その後行きなさい…」

小さな蝶は視線を彼の上に向けた。彼が床に座っているのを見た。瓶に片手を乗せて。彼とは話さないと彼女はいつか自分の中で約束していた…

「…行きましょう…」彼女の声が聞こえた、力なく。「あなたの城を置いて私と一緒に行きましょう…」

王は少しの間徐に黙った。その後退いた。そっと起き上がり、そしてガラスの瓶の蓋をした。

他所を向いた。ゆっくりとした歩調で向こうへと歩んだ、彼女の羽の網から逃げ切ったように…

「去るだって？」それから笑った。

「何処へ行くと？」

「遠くへ…」

決して歩いたことのない処へ。」

「何故？」

「…理由はない…」

また笑った、楽しむように穏やかに。恐らく彼女と。

小さな蝶は、その前の、石の壁の上の生命のない翅々を見た。

「あなた、いつも訳あってするからには、」と囁いた、「この全ての理由を言って？」

しかし王は多分彼女の言葉を聞いていなかっただろう、何故なら少しも笑っていなかった。

...

ただ時間が経ってから、黙って窓際に近付いた。前に屈んだ。その眼下には色鮮やかな彼の庭園が見て取れた。蝶の翅に溢れて...

話し始めた。小さな囚われの身よりも風のに向かって饒舌に。「...彼らのうちの多くは」言って、彼らと分かち合ったあらゆるものを思い起こしながら... 今となっては遠い昔...

「...彼らのうちの多くは、決してこの大広間には辿り着かないだろう。

少なくともまだ飛べるうちに。」

「彼らのうちのどれかは、私には全くもって興味がない... 彼らの翅の形や色、決して私の目を楽しませるものではなかった...

私の庭園の回廊に消えて失せるだろう。そして一瞬たりとも生きなかったかのように。」

「他もまた、私を少しも困らせなかった。

私が与えた神酒に漬かり　そしてそれに生涯を酔わせるに足りた。」

「最後に、彼らのうちに、また別の蝶たちがいた...」

「どれか——恐らく僅かな、恐らく結構な数、もう覚えていない——かつてこの大広間まで辿り着いたのが。理不尽にも私に立ち向かえと思ったのが。

しかし彼らもいつかは選ばなければならなかった... 一瞬だけの死。

或いは終わらない命の延長。」

「何を選んだか知ってるだろう。

君もいつか選ぶだろうあらゆるもの... 他に選択の余地はなかっただろう。」

「ほら　彼らを見てご覧！

私の庭園を飛んでいる。私の近くを飛び　そして幸せだ...

彼らの色彩は太陽の下で輝き、私の大広間など決して知らなかったかのように... それを豊かにすることもなかったかのように...

「もはや私は彼らの幸せだ、小さな蝶よ！

私、私だけが。」

彼女の方に向き直った。彼の視線は彼女の視線に絡んだ。

「受け入れよ」彼女に言った。

「約束する、日に日に君は私達の間小さな同意を忘れるだろう...

そしてその時、悲しむことなく満開の私の庭園で生き続けるだろう。」

彼は螺旋階段の天辺に向かって進んだ。
最初の彼の城に立ち止まり、そして恐らく最後の段で彼女を見つめるために再び向き直った。

「日に日に君も忘れる、小さな蝶よ…」

「…皆忘れる…」

* * *

王は、たまにやって来てただ花を瓶に置いて行った。

しかし続いて訪れる晩は、もはや冷え冷えとしていた。そして以前から毎晩寒さを感じていた。空の色は暗くなっており、そして雲は時折一緒に雨の滴を運んだ。

風は森の湿った匂いを。

小さな蝶は既に慣れていた。

寒さと孤独。雲と湿度。恐らく彼にも慣れていた。彼ですら、若い王に。

そうして、彼が来る時はいつもの一日のようで特別に思えなかった。

彼がその大きな目を近づける時も。ただ彼女に再び尋ねるとき、彼の言葉はどこか変わったように思えた…

「さて？」彼女に尋ねた…
「決めたかい、小さな蝶よ？
今日は、君がここにいる最後の日だ。」

…

やっとのことで彼女は身体を起こした。彼女の脳裏で彼の言葉は流れ、そして直ぐに気に留めることなく消えた。

「言ってくれ」続けた、そして彼女の周りを今一度歩き始めた… 最初に壁の額に近付いた。

そしてその後開いた窓へ。彼の後には花咲く庭々の匂いがした。

もはや疲れていた。そして全てが彼女にとって無意味なようだった。けれどもし答えなければ恐らく再び尋ねただろう。

「どちらを選ぶにしろ、」その時言った、「…君の近くでは意味がない…

君は、唯一の死だ！」

王の顔は軽く曇った。

しかし彼女の脳裏で彼の言葉は流れ、恐らく気に留めることなく消えた。

悲しみが穏やかな青い眼に描かれた。漠然とした興味のように。

「無邪気な蝶よ…」優しく彼女に言った。

「…こんなにも長くここに、
そしてまだ何も解っていない…」

...

彼女の近くに辿り着いて、小さな瓶に触れた。

「誰にとって？」彼女に尋ねた…「私は誰にとっての死？」

「…全てに…」

微笑んだ。小さな蝶は戸惑った。彼のまなざしは彼女のまなざしに消えた。彼が小さい瓶を開けてその後それから遠ざかるのを見た。

「…暖かい季節はとうに過ぎた…」彼女に言った。

「今日、君が去る日が来た。

そして私は、それだけを君に言うつもりだった。」

「しかし間もなく、知っておきなさい」、付け加えた、「君の選んだ森に寒さは広がる… その寒さは君すら逃れられない。」

「そしてその時戻らざるを得ないだろう。そしてかつて拒絶したものを求めるだろう…」

「私はここにいるだろう。」

「…そして恐らく君を許せるだろう。」

小さな蝶はやつとのことで、ガラスの瓶の天辺へ飛んだ。

「けれど去る前に最後に君に言うことがある…」優しく話した…「君に一つ小さなお願いがある。」

「もし望むなら出来る…

君にとっては何でもない…」

再び微笑んだ。

「低く飛びなさい… 低く、お願いだ、満開の私の庭々では。沢山の私の蝶たちの間を飛びなさい。そして彼らに話しなさい… 彼らに私のことを言いなさい。思っていること全てを言いなさい… 経験したこと全てを… その時解るだろう、小さな蝶よ。」

「彼らは君を聞くことは出来ないだろう！

私が彼らを孵化させて育てた！私… 私が彼らを受け入れて守った。私が与えた、君が決して出来ないものを全て！

救済を！」

彼女に近付いた。

「私が彼らにこの上ない贈り物を与えた… 命を！

救済を、彼ら自身から！」

彼女の隣に辿り着いた… 恐らくそれ故に彼の声は異なって聞こえた…

「行け！」ただ彼女に言った。「行け、小さな蝶よ。」

「誰も君を求めない…」

「…君は、彼らにとって死だ！

君は、全てのものにとって死だ！」

「行け！」

「行け。」

...

彼女は窓の中から蜿蜒と滑った。

…花咲く彼の庭々の上で身を低くした。

蝶たちは彼女の周りで最初の時のように飛んでいた。彼らに叫びたかった。そして去るよう言いたかった…

他所で集まり輝き、彼のきらめく偽りの世界を撒き散らしながら！

しかし何も言えなかった… そして王は確かに塔の窓から彼女を笑いながら見つめていただろう。

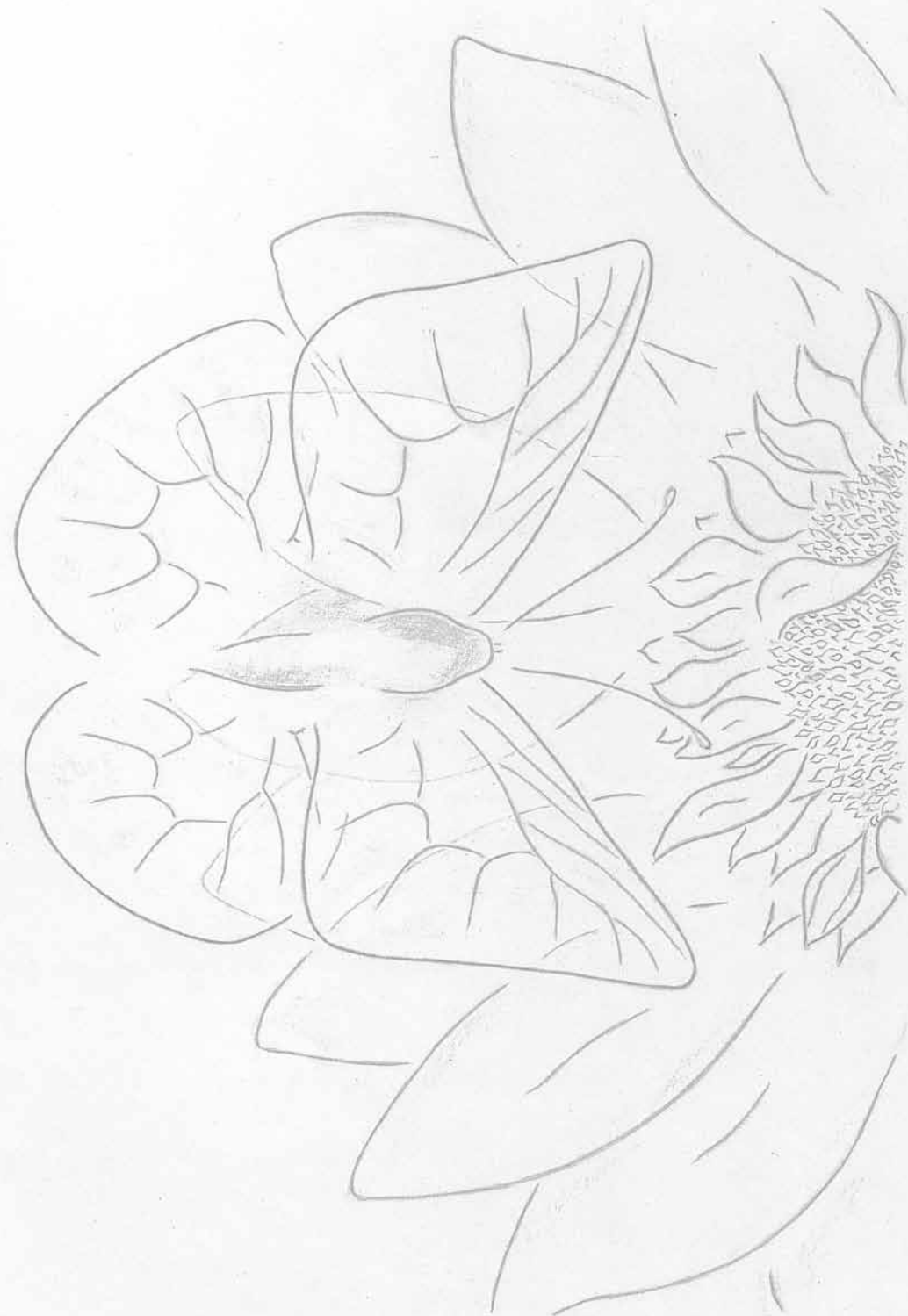
...

彼女の僅かな力を集中させた。

庭々とあの蝶たちから上、高く登った。果てしない彼の城の端々に到った。僅かな間宙に留まった。そしてその時、彼女の小さな羽の動き一つだけで、石の城壁を後にした。

金色の森の最後の春に向かって、去りつつ…











* * *

木々の軽々とした葉は既に土の上に落ち——種異なる雨の滴が…

…空のぼんやりした雲に包まれた乾いた影を残しながら。そしてそれは、間もなく冬の寒気に席を譲る。

川は干上がった。その間にある幾つかの小さく狭い水溜りは奇妙な形に硬化した。

僅かな食料は更に減り、けれど予見していた生き物たちは耐えられるかに見えた。自然の気分を学んでおり、再び冬眠に就いたか暖かいねぐらに隠れたかのどちらか。

そして雪が訪れ、その際は、覆うための荒涼した地の他は見つからなかった——結晶が裸の枝に装いを与えていた。

…風の息吹がそこかしこに吹き、吹き払われることのない新しい命の徴^{しるし}のように…

そしてそこに、——森の傷付いた奥に——白い嵐が一匹の海狸^{ビーバー}の外套を編んだ。

...

青い蝶は二度と戻らなかった。
 雨が触れたのでもなく、寒さの羽のはばたきでもなく。
 そして悲しみが若い王の希望を散らした。

壁の、潜んだ湿気が氷となり、またしても亀裂が増えた。しかし彼は気にしなかった… 多分春には治るだろう。

彼の庭々は枯れた。衰えない花の花弁は風に滑って粉になった… けれどそれらを守ろうとはしなかった。

その冬全ての家来に暇を出した。誰も彼を見ぬよう望んだ。

そして彼も誰も見たくなかった。

…独りで城内の部屋を巡った。独り、雪に覆われた塔へと薪を運んだ。

彼の庭園の蝶たちはゆっくり消えた。そしてかつて称えた美しい色彩を、独りで殺し、独りで大きな額に閉じ込めた。古い額、或いは他の新しい額。幾つかは窮屈に並べられて… 或いは幾つかは捨てられて。

それから一番高い大広間にそれらを掛けた…

しかし久しくそこへは登らなかった。

彼にとってそれらを見ることに意味はなかった。かつてのように、それらを称えることには。

無関心な壁の透明な翅は無意味に佇むに似ていた。

習慣から時折大きな暖炉に火を入れた。習慣から長

いカーテンを蝶の骸を見つめながら引いた。その時思い出していた、無駄な瞬間を、それらの一つ一つを捕らえる方法を。彼の脳裏にある奇妙な遊びのように。

花咲く庭々でどのようにそれらを騙し、どのように誘ったか。そしてそれらは、如何に容易く彼の網に身を任せたか…

城の他の場所に戻る前、習慣から彼は布のカーテンを引いていた。習慣から閉じられた窓ガラスを通して見つめていた。

…眠れる庭々の向こう、そして不眠の城壁。何を待ちながら？

習慣から食べて眠っていた。習慣から彼の不動の世界で生きて呼吸していた。

...

他の日には再び、一日中、その壁は唯一意味があるかに思えた。

自分自身に再び思い出させた… いつまでも惑わされた彼の羽を思っていた。

それから再び美しい、愛する広間に登った… 漠然とした層の時間、重い肘掛け椅子に座って彼らを無言で見つめていた。彼らの中に没頭していった。毎回更に一層…

ただ去って戻った、一瞬も遠く離れることなく。

時が経つにつれ布のカーテンを閉じるのをやめた。
 そして暖炉に火を入れるのも覚えていなかった。
 冬の永遠に続く影だけを大きな窓から入らせた。
 まだ色とりどりの壁をかすんだ光で覆うのを。
 暗い松明と、灰色の彼の心を。

時が経つにつれ食べるのをやめた… そして彼の城
 の他の階を忘れているようだった。
 ただ彼の木の額を深く見つめ続けた。
 そうしてよく向き合えるようにと、彼らに近付い
 た。しかしもはや何も彼に思い起こさなかった…
 彼ら皆を観察しようと更に後ろへさがった。しかし
 彼らには何も見るものがもはやなかった。

徐々に、思考を止めようと全てをやめた。時間を数
 えるのをやめるまで。その日々を、来ることなく、過
 ぎていった日々を…

徐々に止めた、そしてただ、存在することを…

そしてその背後、ある静かな冬の夜、他の夜と変わ
 らぬある夜、我慢出来ず戻った石の床で、熱い涙が青
 い目に流れた。
 その後ろでは、永遠に変わらぬ、剥き出しの壁の映
 像が明瞭になっていった。彼の息は止まり、そして時
 間はその終わりに至ったように見えた。

ゆっくり指の先で乾いた頬をなぞった。
 見知らぬ顔の擦り切れた形。
 力がある限り両拳を握った。

そして叫び声を上げ、常に望んでいたかのように、
 死んだ塔を——一層強く——貫いた。

...

そのすぐ翌日朝から、再び消えていた暖炉に火を入
 れた。
 跪いて小さな、封印した長櫃の鍵を開けた。
 そして、注意深く一つ一つ壁の額を降ろしながら、
 再び一人大きな広間に閉じこもった…

* * *

…遂に、春が森に来た時、どれだけそれを待っていたか示した…

泡立つ川は彼女に飲むよう提供した。

そしてそれは動物の姿を装った。

周囲の雲は開いて、空を贈った。その時は鳥の姿を装った。

休む場所を与えながら、一つ一つ沢山の彼女の傷を閉じた…

その体の匂いと花々が触れた場所を忘れつつ、一つ一つ沢山のその面を飾った。

そして太陽が彼女の上に最も熱い視線を投げた時、黙ってそれに身を委ねた… その軽い身体が、風に溶けてゆくを感じた。

そしてその心臓は散った、蝶の群れ。

…

若い王は再び穏やかに庭の小道をぶらぶら歩いた。彼の城は寂れた。一人城壁の背後に留まった。

家来達はまだ戻る指示を受けていなかった… そして彼に便りをした者皆に、今年は誰も訪問して欲しくないと言った。

…しかし彼の小さな蝶たちは再び時間通りにやって来た。日の差す花々に、薄い羽を誘うようにまとって

陰を開いた。

彼は、その隣に、忠実に、今一度歓迎するためにそこにいた。最初の時のように。

笑うために… 色彩の中に共に迷い込むために。

そして彼らを留めるその香りに… 細い小道を甘く満たし、そっと木々の天辺をそぞろ歩き、そしてその後森の向こうへと去ってゆくところの。

それを追って辿り着いた蝶たちを迎えるために。

彼らが求めていた珍しい、素晴らしい植物を見せるために… 印象的な木々を。

彼の城を親切に案内するために。

小さい部屋部屋を、大きな広間を。技巧的な装飾の空間を…

そしてその後、邪魔されないよう、常に彼らのはばたきを楽しむままにするために。彼らの屈託のなさを、そして彼らの庭々の甘美な花蜜を。

* * *

彼女が来たのは美しい春の一日だった。

城の広間のどれかで、座って読書しているのを見つけた。屈んでいた。夢中になっていた…

彼の周りにはお気に入りの物や品々。それぞれが、注意深く、辛抱強く骨折って間違いなく選ばれたのだろう。

彼の後ろの壁には、彼の肖像画が過去の栄光の姿で掛けられていた。

その時——とても昔——重い王の衣装をまといそして、王座に座り、家臣達や君主達が彼の前に引きずり出されるのを見ていた。

その時彼等は彼の尺の動きに震えていた…

それを降ろすとき、最後を意味した。その逆は与えた、もう一つの始まりを。

常に彼の手には涙と死が委ねられていた。人の運命、そして命と言われていた。

…彼の隣の、大きな木製のテーブルに、彼の庭の花々が涼やかに休んでいた、高価なクリスタルの籠で。

...

太陽は開いた窓から入っていた。

彼女が入ってきたように。

金色の光線が、床に当たり、そしてその後おずおずと部屋中に広がっていた。

彼女が光の中をはばたくのを大きな鏡越しに見た。
そっと、いつの間にか、幅広い窓枠に触れるのを。

彼女も鏡越しに彼を見た。ふたりとも似ていた、かつてのように。

テーブルの上に、持っていた本を置いた。

そして彼女をその中に隠していた鏡の中に彼の視線を浸るままにした… その後ゆっくりした動きで起き上がって彼女の方へと歩んだ。

少し距離を置いて止まった。彼女自身は身動きしなかった。穏やかに見つめあった。恐らく一瞬。恐らくもっと長く。

再び彼が話すまで。彼女が去った日から時間が経っていないかのように…

「…誰も君を求めない…」 静かに言った。やっと聞こえるほどに。

「何故来た？」

...

小さな蝶は太陽の息吹をまとっていた。彼は、その向こうで、半影に立っていた。

「…知らない…」 応えた。「知らない…」

沈黙だったか、時間だったか瞬間だったか、しかし彼は彼女の言葉に笑わなかった。おかしい言葉…

「何故遠くへ行かなかった？」、ただ彼女に尋ねた。

「行ったわ…」 「森の端々に行ったわ…」

「それで？」

彼女は軽く視線を逸らした。答える前に空に止まるまで…

「…何処へ行こうと、森の中心にはいつも一つの城があった… そして一つの塔がその真ん中に建っていた。」

「あなたの城は、私にとってもはや森そのものだった…」

「あなたは」、或る日を彼女は思い出した、「いつか私に言わなかった？」

彼は無表情に留まった。

「季節はそれ以来やって来てそしてまた隠れた…」 囁いた。そんなにも静かに、誰かに聞こえるかどうか無頓着に。

「…どうやって耐えられた？」

「どうやって耐えられた、小さな蝶よ？」 もっと強く尋ねた。「冬はその通過の際、全てを覆った…」

彼女は彼が進んでいるのに気付かなかった。しかしゆっくり彼女の隣に再びやって来た。

彼のまなざしへと、彼女は悲しげな視線を上げた。

「あなたのように…」 ただ応えた。

「そのように…」

ちょうどそのように。」

彼女の上に手を伸ばした。彼女の羽に無言の指の影が広がった。「もっと早く来ていなければならなかった…」、独り言を言った。「何故もっと早く来なかった…」

…しかし答えを気にしていない言葉だった…
 ゆっくりと彼女の方へ彼の手の影を下ろし始めた。
 「何故来た？
 少なくともそれを言ってくれ…」

しかし彼女には言う理由が見つからなかった。
 そして彼にはもはや待つ忍耐はなかった…

彼の手が近付いて彼女を包むのを見た。それが彼女の身体と羽を握るのを感じた… 彼の長い指が彼女を更に掴み、恐らく苦痛を与え、彼女を見るために手のひらを返した時だった。そして彼女が彼の手の中に再びあると、彼の中から笑いが漏れ、恐らく彼女の気分を少し害した。

しかしその時も何も言わなかった。言うことは何もなかった。

「君の羽を動き一つでえ折ることが出来る…」笑いの中で、彼は言った。「何故、何故曲げることが出来ない？」

彼の手をより高く揚げた。彼の中に透明の炎が輝いていた。

彼女を城の廊下に運んでいった。彼等の周囲は全て手付かずで、最初の時のようだった。まれな材質が荘厳な形に… 優秀な手で彫られた家具… 彼のために

作られた部屋に次ぐ部屋。

以前にはなかったドアだけを開けた。
 螺旋階段に出るドア。そしてそれは大きな広間へ…
 一つの広間、片側にカーテンの広げられた。

…小さな瓶は以前の位置にあった。
 彼女の身体をその中に放り込んで軽い蓋を閉めようと用意した。

「必要ないと知っている…」彼に言った。

「しかし…」、優しく意見を述べた、「とても望んでいた——そして君もだと思う——過ごしたことを思い出すために…」

静かに丸い口を閉め、そして唯一の窓の方へ無関心に歩きながら、ガラスの牢屋を運んだ。
 一つの大きな、殆ど空っぽの広間だった。

* * *

…空の青い一角と森の景色が、その隅では待っていた。しかし下の方には、少し前、続く小道と色とりどりの海だった。

「覚えているかい？」優しく訊いた…

「私の庭々を果たして覚えているかい、小さな蝶よ？」

あの窓の前で止まった。

彼の城は太陽の下で輝きながら広がっていた。春が至る処に咲いていた。

「…私の巨大な城壁…」、続けた。「もはや誰をも煩わせない？誰も注意を払わない？」

彼の顔に周囲の匂いの愛撫を感じた。それらに想いを引かせようと彼の隣に浮かび上がっていた。

「私の蝶たちがどれだけ美しいか見てごらん。私のためだけに飛んでいる、覚えているかい？」

私の庭々で生まれて産む、自分らのと思っている子供たち。」

「…そして彼らのまさに死の瞬間」、付け加えた、「羽は永遠に私のものになる…」

あの時と同じ寒気が彼女の身体を貫いた。しかし今

や、恐らくどうにか慣れていた。

「君は求めている」、彼に言った、「決して手に入れないものを…」

微笑が咲いてそっと彼の唇で枯れた。理解に満ちた微笑。多分それと共に彼女の言葉を打ち消したと彼と言えただろう。

しかしその後落ち着いて大きな広間の内部に戻った。高い円形のテーブルに瓶を置いて、彼の脳裏に彼女の言葉が戻った。

「…小さな蝶よ」気付いて、再び微笑んだ。「沢山の季節が君の上を通り過ぎた。それらすら君に何かを教えられなかった…」

「同じ間違いをまだしている、最初のように…」

彼の視線は厳しく、しかし同時に愛情に満ちているようだった。彼の声は彼女の中に深く沈んでいった。ゆっくりした声、通りすがりに温もりを滴らせながら滑っていた。

「あの蝶たちは… 君が見たばかりの蝶たちは、君が何を想像しようと得られないだろう… 何を君がひとりで想像しよう。」

君、小さな蝶よ…

君は、決して何も手に入れない！決して。

私は出来る。

出来る！」

「ご覧、もし恐らく望むなら」大きなカーテンをし

っかり掴みながら彼女に言った。

「よくご覧、小さな蝶よ、君がかつて求めた真実を…」

「…あれらの身体、
…あれらの身体と羽…」

…**全て**私のもの！」

* * *

力を込めて波打つカーテンを自分の方へ引いた。

そうして彼のお気に入りの壁を、剥き出しに、顕わにしながら。その壁を、常に押さえていた彼の言葉を、明らかな証拠を。

一瞬それを見つめることが出来ず、ただ留まった。

そしてその後再び向き直って彼女を見た。彼女の或る動きに読み取ろうと、果たして今何をその目に隠しているかを。

…何故——とても奇妙な——彼女の前に現われたその壁は同じに見えなかった…

同じ一つの城で、それだけが恐らく変えられたのだろう。

そしてそれを見る者は誰でも、とても変わったと言

っただろう…

変わった、言っただろう、永遠に。
頭にされた今、同意しただろう。

…それらの額は——羽が一杯の——かつては壁を飾っており、偶然の調和でその表面にはなかった。もはやそうではない。

疲れを知らぬ手がそれらの場所を選び、何度も何度も取り付けたかのように。

続けて掛けられ、殆ど隣同士に、はっきりと同心にその広い幾つかの弧を形成するまで。床と、天上の禁じられた線の間に、想像豊かに閉じ込められた弓。

…波のように開き、更に広がり、遠ざかるにつれ静かに消えていく弓。

閉じつつある弓、更に集まる弓——群れる花卉のように——、やがて創られたばかりの中心へと完成された円を形作りながら。

似通った、調和した、非の打ち所のない壁に掛けられた額。思考を包み込む、そして君の目の洞を…

…そしてそこ、それらの全ての円の中心に、その大きな広間の中心に——開いた窓の真向かいに——、もう一つの額が寄り掛かっていた。

一つの素朴な、空の四角い額。
最も美しくて羨望の、茶色の木。

...

青い蝶は無言で佇んだ。恐らくぼんやり、彼女は感じていた、漠然と全てを聞くだろうと感じていた。

王はただ、起こった全てと始まった言葉全てをを忘れてしまったかのようで、動揺もなく壁の中央へ歩んだ。

その近くに到ると、そっとその小さな額に触れた。額の奇妙な温もり。

…見つめている間随分時間が経っただろう。その囚人に殆ど無関心で。彼女の方を向かず、再び話そうとした時。

…風が吹き込んでいた、ほんの少し、開いた窓から。

一緒にこっそりと、広間に入る一瞬前に、森の匂いを贈った。ある匂い、花々の媚を売るような息、そして木々の絶え間ない呼吸が区別出来ないぐらいに織り込まれた。

「かつて…」、
言って始めた。しかし彼の声は戸惑っており、彼の表現は少しの間未完だった。

「…何年も前」囁いた。

青い蝶は喋らずにいた。空の額を見つめていた。そして一つのイメージ、その前に忘れていた、そしてそれが消されたを思い出していた…

「その頃私の城が建てられていた…
当時まだ私の城壁は造られておらず、そして訪れるであろう戦争を私は知り得なかった…」

言葉は彼の唇に再び留まった。何年もよみがえらせようとしていたその壁に、まるで打ち勝とうとしているようだった。

彼の眼差しがちらつくまで。泳ぎ、小さな額の見知らぬ深みに消えた。

「その時全ての広間の中で最も特別になるようこの装飾を求めた。」

「透明な羽が」、続けた、「至高の美を見て、一つ一つ素晴らしい私の蝶たちを既に集め始めていた…」

「…予期せず、ますますのめり込んだ…」

...

「…森の中で最も美しい木材を見つけて持って来るよう家来達を送った。」

「耐久性のある、目立つ木材… 私の城で最も貴重な財産だ。」

彼の頭を軽く石の壁にもたせかけた。手には額の絶え間ない温もりを感じていた… その木材の安らぎ。

そして彼は、表情を変え、ある瞬間には漠然と無表情のままだっただろう。

「…当時至る処を長い間探していた、覚えている。森の隅々まで枝を集めながら。」

「或る日、春の一日、手に一本の枝を持って戻るまで、一本の木からと言った、違う… 違う、見たこともないと言った！」 …命を得たかのようにだった、額の隣に屈み、彼も輝いていた。

「沢山あった… しかし他のどれも同じものはなかった。」

「遂に！」、多分彼の考えそのものに笑った、「木を持っていた、そう言った、それが私の壁を飾る額を形作るための。」

「…次に、彼等が導く処へ一緒に行った…」

…

彼の歩みは日々を遡っていた。森の消えた小道を見知らぬ方向へ。

笑い始めた、一人で再び。止めるまで。恐らく徐に。

「愚か者達！」、怒りを込めて言い、直ぐに黙った。しかし怒りを完全に抑えることは出来なかった。彼の前から追いつくことが出来なかった。

「小さな空き地、まだどうにか薔薇色の夜明けの光に、たった一本の枯れた木があった！腐っていた。

とても寒々と暗く… 春の盛りだったが…」

「間違えたのだ！」甲斐なく付け足した。「それではなかった。そしてもし恐らくその根が地にゆっくり沈んでいったら… そしてもし立派にその体を空に向かって直立させたら、違っていた… それではなかっただろう。

そこにあることはあり得なかった！

探した… それを見つけようと至る所を探し回った…

…けれど何処にもなかった！

…

絶望は既にその潤んだ目に表れ始めていた。少しづつ乾いた唇に線が刻まれていった。

「あの木から唯一自分に残された、一本の枝。たった一本の枝！

額を一つ作るのがやっと。けれど今となっては、そんなに気に障ることじゃない。自分の手には一つ、欲しかった額があった… しかしどの蝶もそこに納まるには値しなかった！同じ起点に立ち戻ったようなもの。」

「…別の額を作った。とても美しい額。もっと大きな額。その中に他の蝶たちを納めた… どれも自分からはもはや逃れられない。」「…一匹も。」「同じ失敗がまた起きてはならない。他を探していた。そしてさらに他を…

それを探し求めて、唯一見つけられなかったそれを…

それ、決して現われなかった…」

彼女の方に向き直った…

「ずっと隠しておいた」、口籠りながら言った、「私の城の一番高い塔に。」

彼の目は霞んでいた…

何処を見つめても見分けがつかなかった。けれどそこにあると認識していた。

「君を待っていた」、それから彼女に言った。「…ずっと君を待っていた…」

「それら全て以前に、いつか君が来ると心の奥底で感じていた…」

彼の声はもはや辛うじて発せられていた。

その声は消えかかっていたが、彼女に届かんとまだ広がっていた。

「この額、
君に作った…」

「…かつて君は私に何故かと尋ねた、そして私は答えなかった！知らなかった。

けれど今は知っている！今は、覚えている…」

「この城…」彼女に言った…

震える体。

途方に暮れて屋根を探す二つの目。

「…この城、

君のために建てた！」

…そして望んだ一呼吸、

その最後に触れたであろう。

「君のために…」

…決して来ることのなかった…」

* * *

彼女は頭を傾げていた、ガラスの瓶を見つめながら下の方へ。

王は疲れ切って彼女の近くへ歩んだ。「私は君に公平でなければならない」、彼の萎れた言葉は弁解に聞こえた。「かつて、私もした——私自身——一つの過ちを。君に…」

瓶を手に取った。青い蝶は再び喋らなかった。

「…過ち」、無表情で彼は続けた、「君を逃がした。君が信じるままにした過ち、私の壁に君のための場所はないと。」

「…私の城に君のための場所はないと。」

「しかし今君は知っている！」ゆっくり言った、その声に幾らかの力を殆ど得ながら…

「…君の場所は、私の城全部だ！この私の額——そんなにも容易く拒絶した多くのうちの一つ——君の避けられぬ目的地！

そして私は、君にあれだけのことをした… 君から生まれた私… 君から遠くにはいられない。

選択の時が来た。そして私は、もはや君を逃がすこ

とは出来ない。」

瓶を高く揚げた。塔のどれかに立っていた、その大きな部屋の一つ、中央に。

「選りなさい、さて、小さな蝶よ。」

「だが正しく選りなさい」、彼女に警告した。

「これが、君の最後のチャンスだ！」

「私の城全部…」

或いは私の一番美しい額に強く抱かれて！」

* * *

…話していた、しかし彼の言い回しが強まっていても、風の通過に空しく失われていた。

小さな蝶はずっとあの額のほうを向いていたので…

もはや若い王を忘れていたかのように。

「私の小さな」、ただ囁いた、「額、」彼女の傷を裏切りながら、「誰も… 誰も君を作っている間君のことを考えていなかった…」

堅固な、不変なその姿が、こっそり向きを変えて彼女の考えを変えた… 一本の枝、少しの間育った一本の木… 彼女がかつて出会った。枯れた、或いは花咲く——全ての中で最も美しい——森の中では常に空き地のどれかは忘れ去られている。

「…選びなさい…」彼女の背後で嘆願し命じる、彼の声が高まって…

…何も言うことはなかった。黙って佇んでいた。
その一部は無言に留まり、その壁に掛けられていた。その一部。とても小さくて疲れていた。
彼女自身できただろう、一瞬だけ言うことが、それを飾るように。青い海が相応しい、それにとって、最も美しい、果てしない海岸に囲まれて…
でもそのようなことは、決して起きることはなかっただろう。

目の前でそれを見ていた。彼の塔にあって、今や何年も、それを待っていたかのように辛抱強く。誰が何を知るだろうか…

「選びなさい…」、どれ程彼の言葉はより強く響いたか… しかし、悲しいかな、どの道を見つけるのか、彼女の近くに到って立つために。

彼と一緒に常に——愚かにも一緒に——、ある小さな、小さな蝶はその中心に捕らわれて飛ぶに耐えていた… しかし彼女は、同じように無言で、いや、それほど必要はなかった。

…見えない彼女の羽、王は決して見る事が出来なかっただろう… 恐らくそこ、でも常に彼の収集に欠けていた。恐らく彼女を覆っていた、そしてもはや不本意ではなかったとしても… しかし誰かが見るに値するたった一つであったろう。

「落ち着いたままでいて…」音を立てず彼等に約束した… 「あなた方と私は常に私達の秘密を隠すでしょう。
そして世界は皆、恐らくとても後になって何を永遠に失ったか感じる…」

「選びなさい…」 その時叫んだ…

誰が話していた？
小さい額を敬わなかった者！
…決してそれを理解しようとしなかった者！森で一番美しい木から取った一本の枝とそれを変えた… その中にまさに命を閉じ込めようと求める者！

…一陣の風が彼女の中から噴き出し始めていた…

彼、幽閉を求めた… そしてその夢の孤独なはばたきを…

…彼女の羽を広げ、しかし触覚は閉じていた、たった一瞬だけ同意したように…

「小さな額、あなたのために来た！」彼女の考えに話した。「誰も敬わなかったあなたのために。私にだけ価値がある、けれど決して私を求めなかった！」

…

…一陣の風だった、風を貫いたのは… ガラスの面、壁、そして彼の城壁。
生き物たちは集まっていた、一本の木に到って、森

のある隠された空き地に、そして川の流れを変えた、
彼を引き寄せながら——それもまた——彼女の近く
へ。

開け放って小さな、彼女の軽い羽を支えた。

太陽は彼等の中で彼女の全ての色を虹色に輝かせ
た。一つの虚ろな空の色彩… 彼女の世界は何も言う
ことがなかった。しかし彼女の時は訪れた、あの王の
最後の願いを聞き入れる…
そして、彼の方へ、向き直った。

彼は彼女を見るために佇んでいた。空と海、混じっ
て消え、彼女のはばたきの一つに… 彼女の沈黙のみ
に、沢山の森が潜んでいた…

そして彼は長い間彼女の一つの答えのみを探してい
た、それを得る前に一瞬だけが残されていた。

「とても残念…」彼に低く言ってその目に影を落と
した。
何故？

「残念…」
…一瞬だけだった！
全てが彼から遠かった、一瞬だけ。

「しかし私のために作ったこの額、
決してその羽を拘束しない——

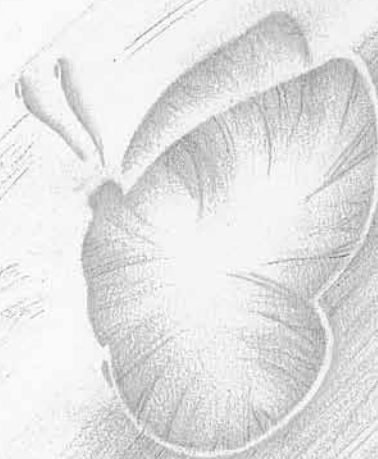
そしてこれ——
或る日建てたこの城、

あなただけを閉じ込めることが出来る。」

…

東の間の笑い声とその広間に聞こえた。そして唸り
声がした時、城の廊下の至る処周囲に旋風のよう^{つむじかぜ}に広
がった。
唸り声、しかし森の動物には似ていなかった…

…殆ど同時に、一つのガラスの瓶が砕けようとして
いた、不似合いな一つの額の輝かしい静けさに…
理由も悲しみもなく、一羽の蝶の小さな身体と共
に、割れた破片が否応なく床に落ちようとしていた…



* * *

彼女をその掌に持っていた。貴重な雨水のように。

…しかしそれを求めていなかった、一滴も…　そこで、向こうで、至る処で、皆と全てから彼女を守ろうとした。

誰も、決して…　決してだれも彼女に触れないように。

彼女は裂けた自分の羽を見つめていた…

沢山の破片が彼等に当たった。しかし何を感じようと悲しみはなかっただろう。ただ計り知れなく分かたれない沈黙…　しかし彼女の小さな額、ガラスの瓶が今や割れてしまった。そして王は、何も言わず既に彼女の近くにいた。

ただ跪いて彼女を持っていた。彼女を両手に持ち、そして目を閉じていた。何をしたか訊かれないために、考えを消した。

どのようにして出来たか尋ねられないために…

「…望むものを何でも求めなさい…」、それだけ彼女に言った。

「何でも望むものを…」、そして音は広い部屋に消えた。

…

彼女は無言でいた。

…音は消え行くようで、衰えてゆく轟きのように…

何も望まなかった、本当に。そしてその羽、疑問に思った、果たして何故かつてそれらを望んだか？ …しかし王はまだ出来なかった… そしてまだ、彼女の答えを待っていた。

孤独を思い出した。その日々を——果てしない日々を——ガラスの瓶の中で。彼女のいつかの青い羽を思い出した… かつて太陽を持っていた羽。

王を、思い出した、最初に始めたように。

「…もしあなたに私を殺すよう求めたら…」、意味もなく疑問を抱いた、「…それをした？」

彼は狼狽した！彼の体はいつかのように再び震えた。

「いいや…」、怯えて答えた。「決して…」

小さな蝶は少しの間目を閉じた。

「どれほど不思議…」愚かにも囁いた。「…随分前に、しているのに…」

「行きなさい」、それから彼に言った。

「城を置いて私と行きましょう…」

ある輝かしい… ある屈託のない日だった…

王は深く見つめた。彼女の目を、何を見つけようとか誰が知るだろうか… 「駄目だ」、彼女に頼んだ。

「それを私に求めるな、解ってくれ…」

「この城は私の命そのもの…」

彼女は頭を傾けた。いいや、いいや、何も言いたくなかった。

「…この城は死を隠している」、頭を傾けて話した。
「いつもそれを見るのを拒否出来る… でもその中では決して命を知ることがないと知っている。」

…そこに留まった。無言で、長く忘れ去られる程に無言で… 静止した、空の広間の一つの最小の姿。

そしてその後ゆっくり起き上がった… 掌を注意深く合わせて支えながら。開いた窓の方へ歩んだ。変わらぬ彼の塔の端へ。幅広い窓枠で止まるまで。

美しい、魅惑的な色彩の彼の城の上で。

「待っていてくれ」、彼女に言った。

「城壁で待っていてくれ、そして来るだろう…」 「出来るか… まだ飛ぶことが出来るか？」

…彼女は再び向き直って彼を見た。

「一緒に行きましょう」、彼に頼んだ。「私は疲れていて…」

「行く前に…」

「一緒に持ってゆくものがある、何か最後に。」

元気付けるように頷いた… その手を宙に伸ばした。

「…小さな蝶よ…」

「行きなさい。」

「…行きなさい…」

動き一つ一つに、彼女は痛んだ…

彼の手の端へゆっくり歩いている時だった。そしてそれからどうにかそこから起き上がった。風の息に、羽は差し出されていた… 彼女の背後で閉じられる指をそのままに…

去りつつある傍ら、閉じられてゆき、ただ空だけ。

…彼女を長くは見つめていなかった。落ち着いて大きな広間の中へと戻った…

彼の視線は一度その周りを彷徨った。まだもう一度。

その前に手当たり次第一本の松明を壁から取った。床の穴へと歩む前に。

階段の跡を辿りながら、素早く続く階へと消える前に。

…しかしそれらの階でも遅れはしなかっただろう。たとえそこで何日も、彼は過ごしていたものだったとしても。彼の歩みは今や広がってただ彼は通り過ぎただろう。

彼の行く先を一本の松明だけが照らして。

炎の中で重い鉄の扉を開けただろう。

一つずつ目覚める狭い階段を見ただろう。

彼の城のおざなりにされた深みに触れるまで… 暗闇だけが届き覆う深みに。

…不安定な、ぼんやりした光を見ながら…

とても強い、よく守られた、戦いに決して屈しなかった…

…

…少しの時間、しかし随分たったようだった。別の時間が流れたかのようにだった。速い動きが、ゆっくりに思われた。

最後に後ろを見つめた…

最後の瞬間静止した…

しかしその時は来た、去らなければならない時。

* * *

…時間は経っていった…

時間は経っていった、そして彼は来なかった…

城壁の天辺にそっと身を任せていた。もっと前は、そこでは耐えられないと思っていたとしても。

身動きせず、辛うじて呼吸していた。

そしてその後振り返って城を見た。

彼女の前に、大きな塔がそびえていた… 近寄り難く、光に身を委ねていた。

その土台の近く、門と貴重な彼の庭々。

…その門に現われるのを彼女は待っていた。何処かで彼を見るだろうと彼女は待っていた、その庭々で…

進むのを。よく見てみた。それらを通り抜けるのを。 全てを見つめた。

しかし時間は経っていった…

…道を、彼女は思った、彼女の近くに出るのを見つ
けるだろう…

しかし時間は経った。ただ経った。
そして彼は来なかっただろう。

…

…そして彼女が城で微かな動きを見た時だった。二
度と現われないと待つのをもうやめた時… 静かに見慣
れた場所に再び佇んでいた。無表情で、無関心な姿…
全てを携えて。
無傷な… 変わらぬ姿。全てを忘れて…

一番大きな、最もお気に入りの塔の、高いところに。
開いた窓の——心乱さず——真後ろに。

…彼女の方を見つめているようで、そして彼女も彼
を見つめている…

* * *

…ただ彼女の目と身体を向けた、森の側の方へ。他
に何も見たくなかった。
他に考えたくなかった、森以外…

森は彼女の前に広がっていた… 彼女を色彩で飾っ
た時のように。そして彼女に遠くへ飛ぶよう言った時
のように… まだあった、そのようであっても、小さ
な羽が。実際に、かつて望んだものではなかった？

…彼女の背後で…
…雲が微笑みながら見つめていて、彼女の上を流れ
て去って行った…

…彼女の背後で、彼女の小さな額が砕けた…
それは彼の世界を横切っただろうが、彼はそれを所
有しないだろう。決して羽を閉じ込めることはなく、
永遠に輝いて失われるだろう…

その城は彼女の背後にあった。一つの、出口のない
牢屋となっていただろう。
そして彼は…

彼女と分かち合うことを望んでいた。最初は強く、
彼女をその束縛に包むことを求めた… 違う！
彼女にもたらさなかった… 彼は、決して知らなか
った、そして彼女に何か他をもたらさなかった、痛み
と死以外は。違う。

最後に後ろを見つめただろう。
最後の瞬間ただ佇んでいただろう…

森のそよ風は彼女の近くに届いた。しかしどうやっ
て見つける——どの意義が耐えられる… 再び彼女の
小さな羽を広げただろう…

そしてただその空の体へと戻っただろう。

* * *

…彼女は満開の彼の庭々の上にいた、

そして彼の瞳の海に彼女は浮かび上がりつ
つあった 爆発が起きた時…

そして彼の城が——恐らく森全体が——その底から
衝撃を受けた。

まるで、どれだけ少し、果たして何が変わったの
か？

…誰が理解出来ただろうか？

力はもはや抑えられないようだった… 壁は支えも
なく。一番高い塔が低くなったのを見た時…

知らぬ理由によってゆっくり引き裂かれるように。

…そして開いた窓が落ちるのを、彼をその真ん中に
置いたまま…

熱風が——ほぼ同時に——彼女の身体に当たるのを
感じた時。彼女の傷付いた羽をしっかりと包むのを…

そして彼女をさらう、語られぬ拒絶の時間に、
遠く…

…庭々の向こうに。
…そして彼の城の壁から。

向こう…
終わりの向こうから。
…そして彼の世界の始まりから…



* * *

朝であり、そして太陽が、熱く、光で青々とした森を洗っている。花々は沢山の色に、茂みや積まれた群葉の間に咲き、一方で風は木々の陰を和らげながら掠めるようにゆっくり通って行く。

小さな空き地の青い花々に——涼気の湖のように——透明な香りを周囲に撒き散らしている。

…間もなく、土はその場所を洞穴に譲り、そして岩々はますます高くなり、再び谷の景色を見る前に。花々は再び、群葉と同じように、不可解な引力によって突き動かされ、新たに一時的な水平線を目指す。

ある川は同じリズムで決して知ることの無い道を横切りながら流れている。

しかし向こう… 川と空き地の向こう、森の遠い中心で…

木々の海の風いだ向こうの丘ののどかさに、何か前日を変えるに似た。

...

突然そこに埃が立ち、生まれた地にそっと戻った。
城壁は、ゆっくりそして再び現われて、理由もなく佇
み思い起こさせる…

時の経過に消え失せる前に。

それらの間にかつて見えていた城は、もはや識別出
来ない。どんな理屈で、ゲームが裏返って沈めた？

更には溶解のイメージが広がっている——霧の糸、
消える炎… 最初はしなやかなその体を保ったよう
に、床の瓦礫、ぼろぼろの額と羽がもっと向こうに残
った分だけ。

より特別な花々に寄り掛かる涼気、かつて一体だっ
た塔の面影。

…そしてそのようにして石は枯れない庭々へと転が
った… 庭々、悲しいかな、恐らくもう花開くことの
ないだろう。

それらを取り巻いていた蝶たちは、今や存在しな
い。爆発の瞬間遠くへ吹き飛んだ。幾つかは、風の流
れに従うだろう。その城はたとえ彼らの羽を飾ったと
しても、森に忘れ去られる… 森が容易く忘れたよう
に、そこに留まるために。

そして幾つかは夜になる前に戻るだろう。最初のよ
うに、不思議にも、決して見つかることの無いものを
再び求めながら。

或る春にその日が来るまで… 大地の上に、無傷で
新たに結合した層が広がるだろう… そして別のイメ
ージが現われるだろう。消える前に。

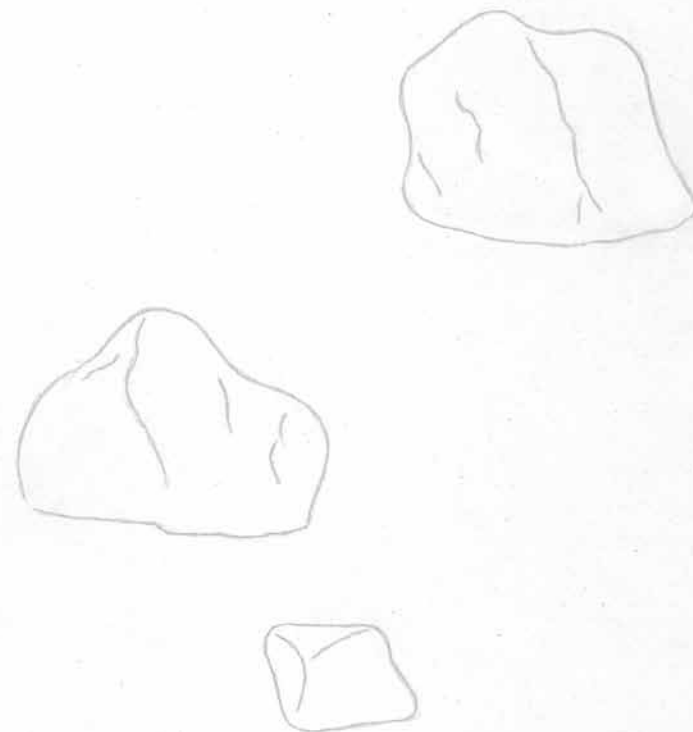
…ただ一羽の… 一羽の小さな蝶が、それでも残
る。

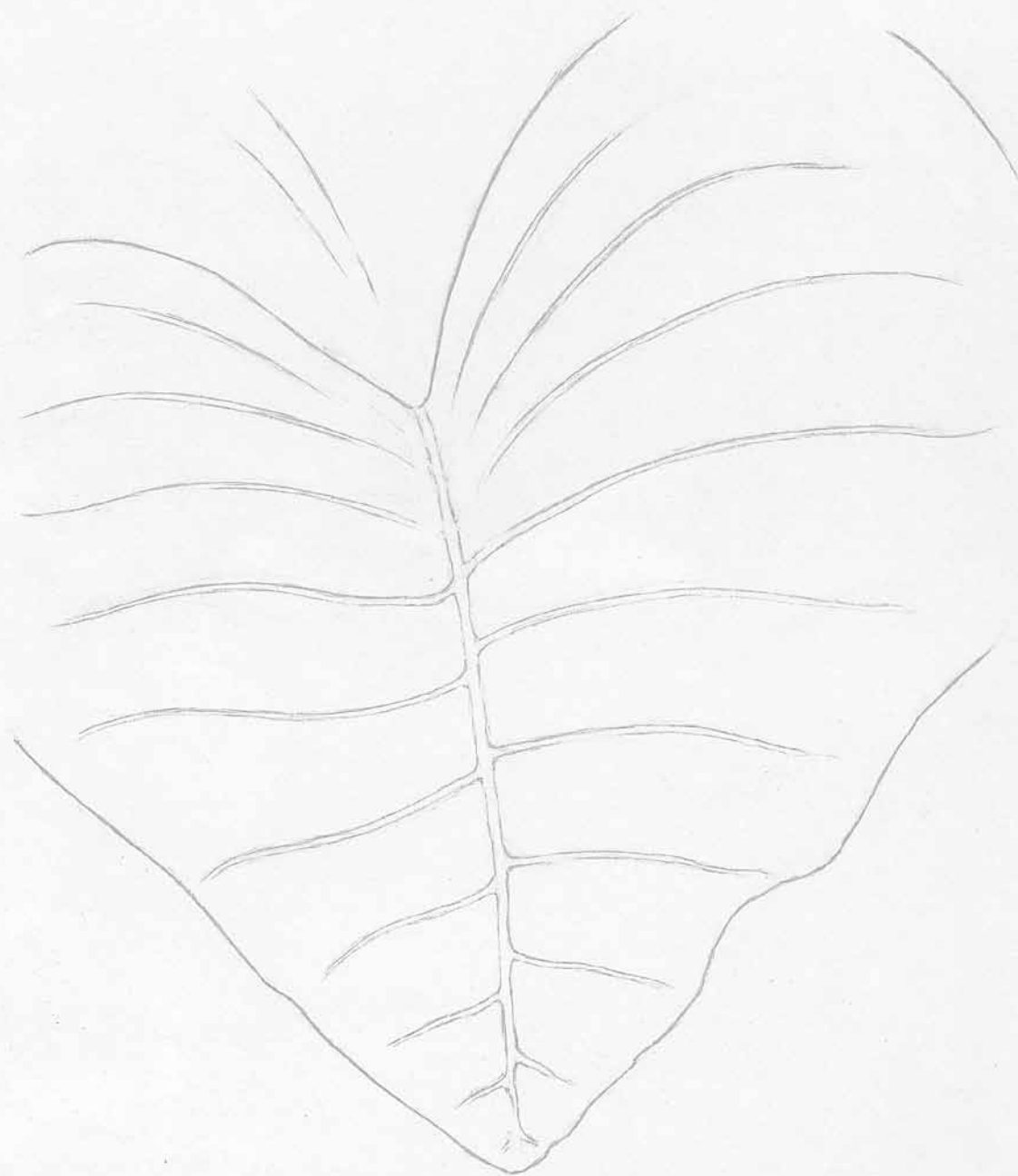
その何処かに。城壁の真ん中に。とても小さく…
することは何も無い。至る処が寂れて。煙だけ…
何も言うことは無い… 至る処に沈黙。

…ただ飛ぶだけ。
亡き王のために飛ぶ…

透明の帯が擦り切れた彼女の夢にぶら下がる。
しかしそのようにまだ、より温かかった
そしてより温かいだろう
…空の温かい青よりも。

…それぞれの色はより深く…
深い大洋の
色より。





もう遅い…
そして何千年も既になっている。

…誰も小さな青い蝶がどうなったか知らない… ただ、いろいろな人々が言った、次の冬に死んだと。

他の人々は、青い花々と一緒に空き地にずっと生きていると、或いは太陽の形をした花々の上をまだ微かに飛んでいると… 更に他の人々は、誰かがずっと前に殺したと言い張った。家の一番奇妙な額に、その羽を飾っているのを見たと…

しかし後者を自分は、信じる事が出来ない。

より深く考えた者達は、彼女は消えたとそのように自分達が真実を言っていると主張し、しかしその羽は風を旅していると。その身体を求めひょっとして見つかりかつてのように自分のものにするだろうと。

最後に、青い蝶について滅びなかったと言われており、一本の古代の木の端にそっと身を委ねたと… 或いは何らかの方法で繭を再びつむぎ、或る日恐らく生まれてまた最初から始めると。

…

…自分はそれ以上知らない。恐らく皆正しい。恐ら

くただ皆が、間違っている。

しかしまだ少し、あの小さな蝶はかつてはばたいたことを覚えていると思う… その誕生から自分は何も言うことを知らないとしても。彼女がさまよった森の詳細を自分は心に留めていなかったとしても。倒壊させた城のその名前も。

…しかしもし誰かが全ては運の問題だと言うなら、自分も起きなければならなかっただろう何かを思い起こすだろう。

そしてあなた方の誰も気にしてはいないと知っていても——恐らく王たちの誰かはさておいて——いわゆる、時間の問題で彼女は再び現われる。

あなた方が望む処なら…

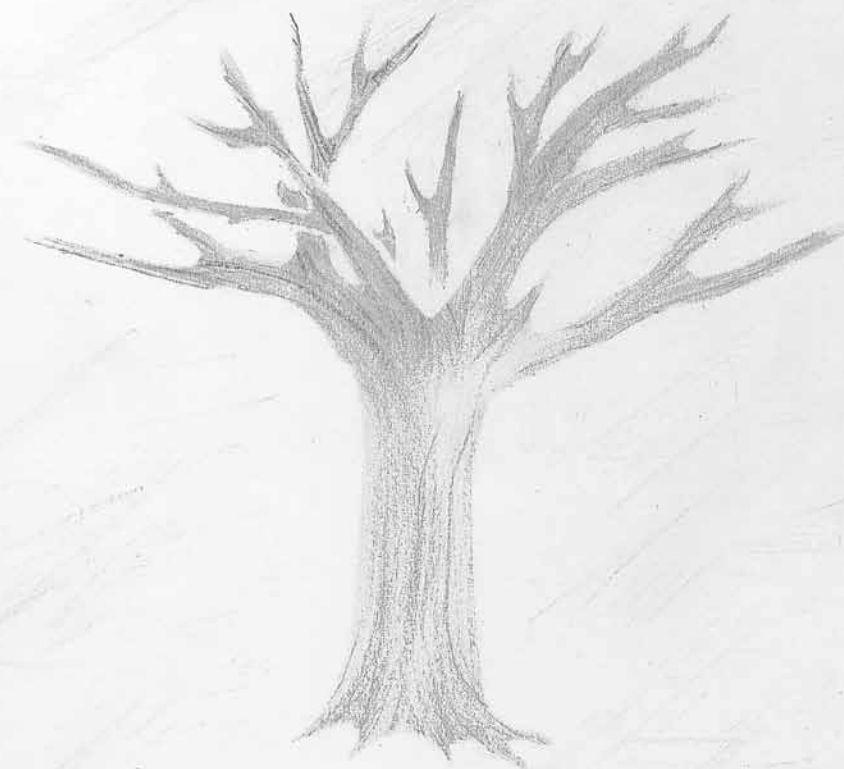
森の恐らく古代の木のどれかであれ。蝶になると言われている蛹のどれかであれ——それを自分は望む…

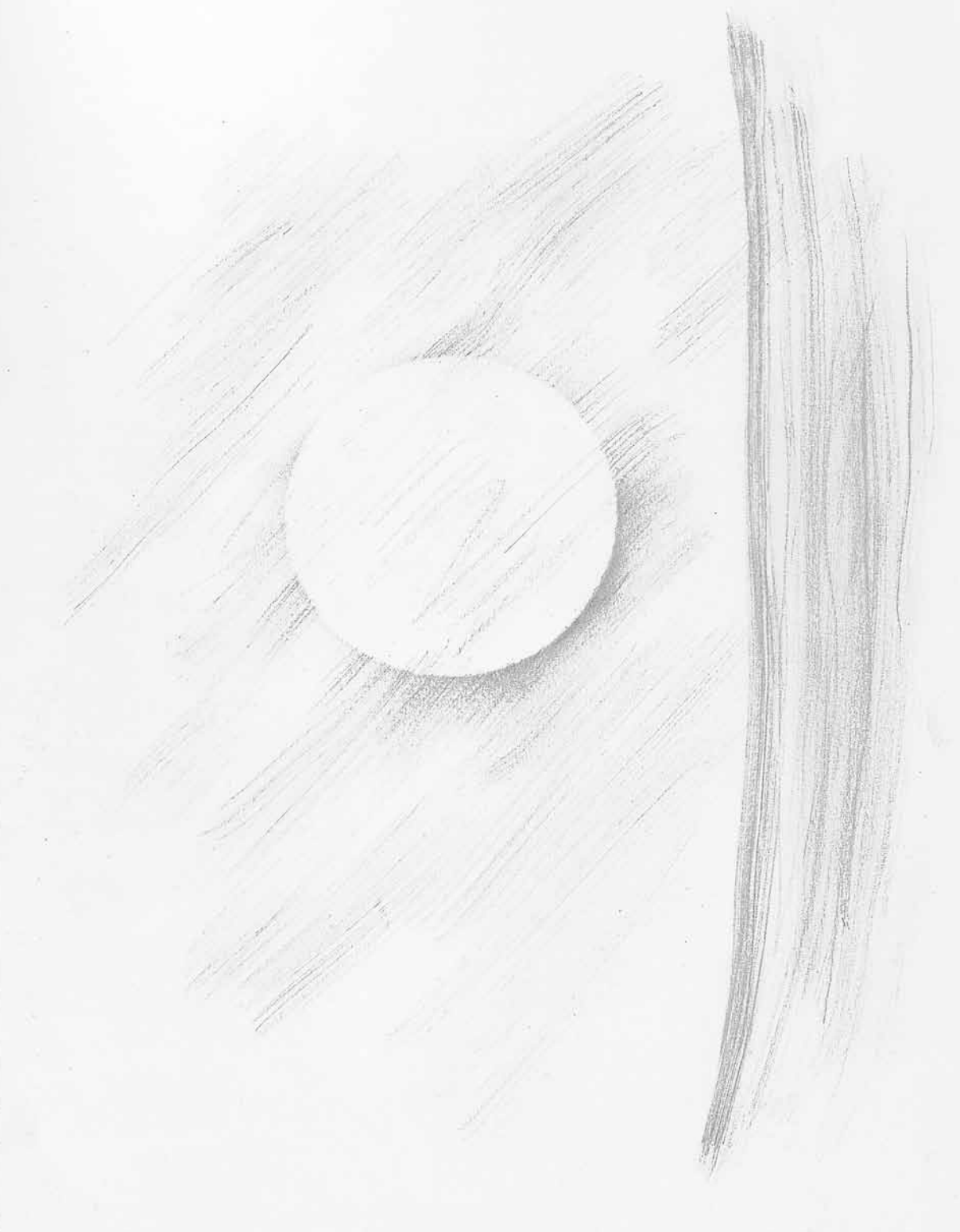
あなた方の望む時に。

その時まで…

我等の紙の繭を、破る瞬間まで…

おやすみなさい。







…存在しないある本の
ページから…